290.8-Ta74ウ
12005007327 80

297.38
N77

917
165

叢書 第五篇

ニューギニア

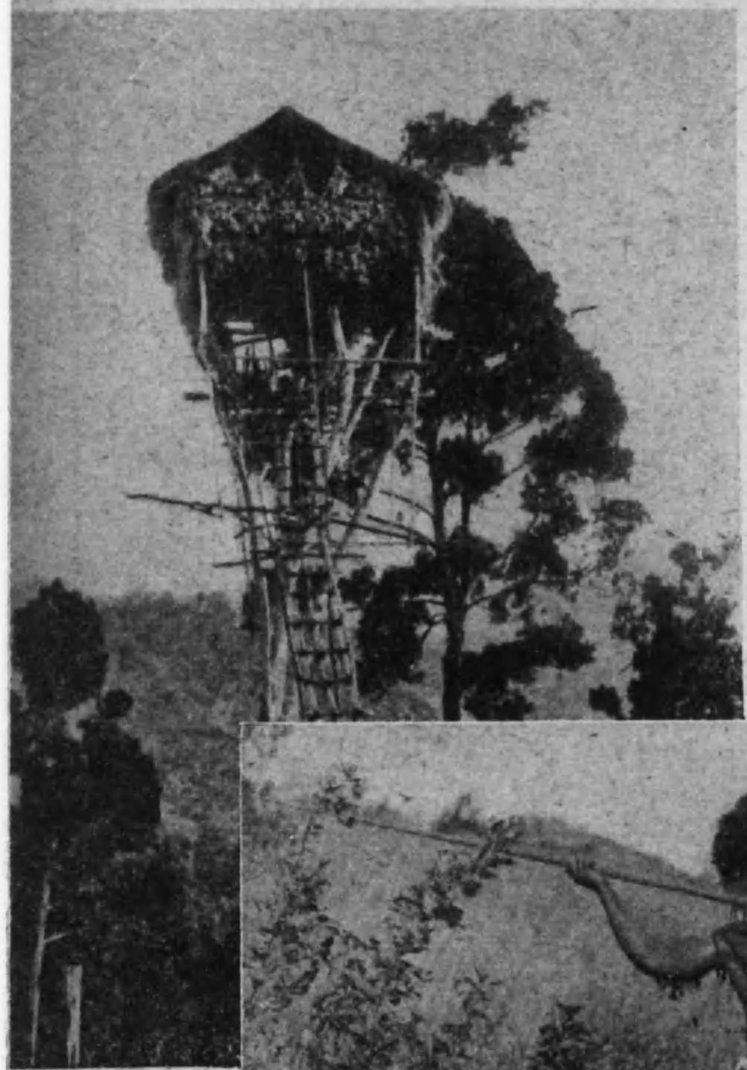
戦團法人 日本拓殖協會

769

拓殖叢書　第五輯

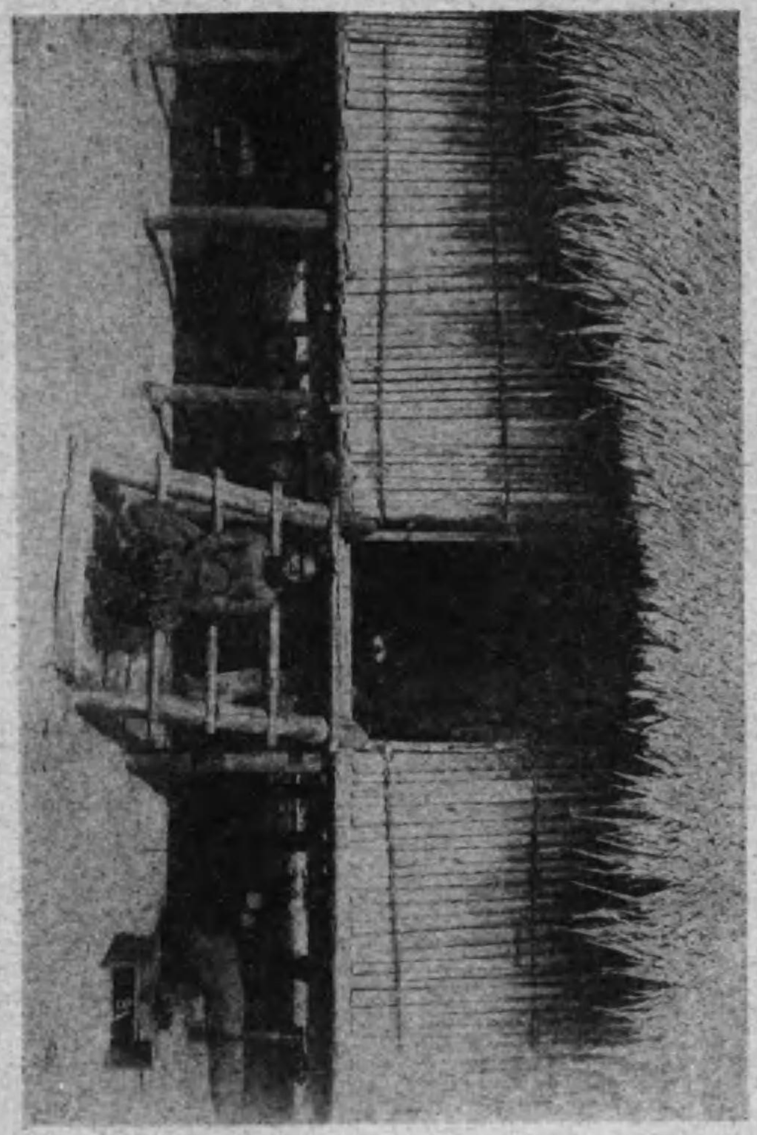
ニューギニア

財團法人 日本拓殖協會



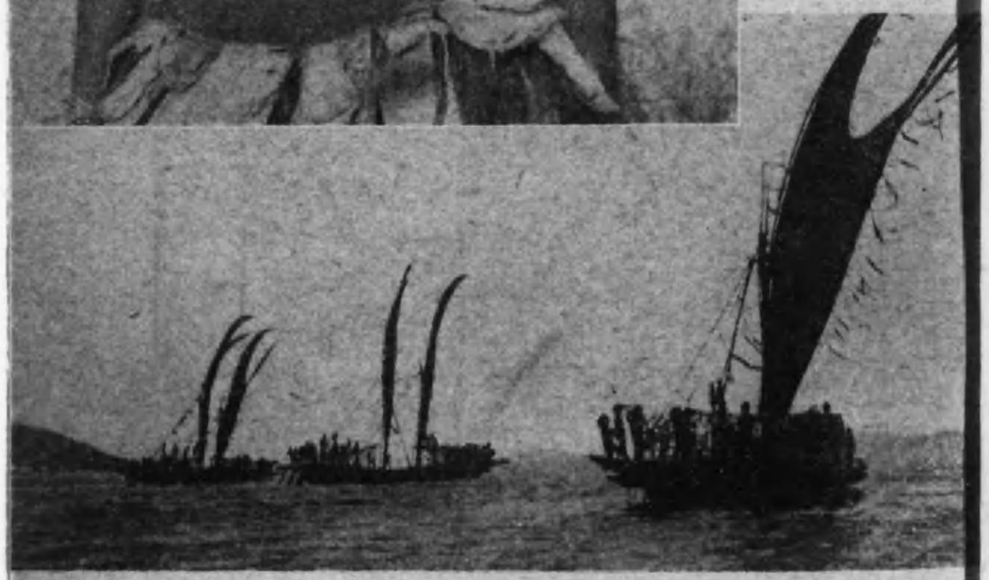
ガシリの樹上家屋（ポートモレスビー付近）

エレヴアラの原住民（胸の飾は戰功のしるしである）



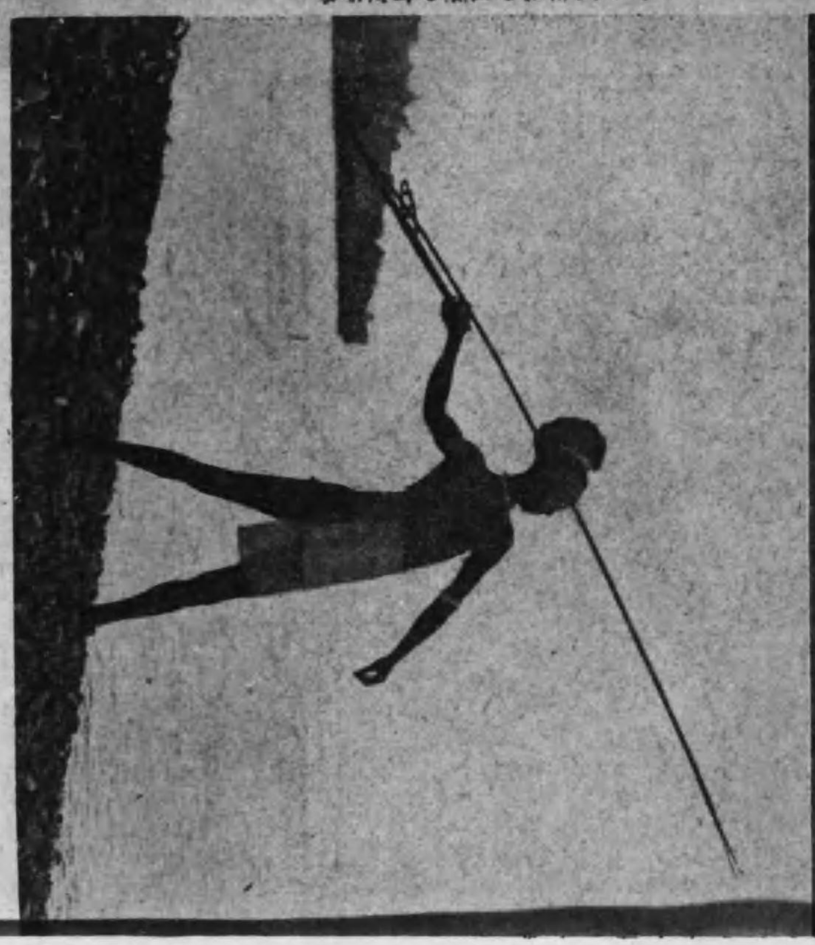
ニューギニア原住民の住居

腰、腕、首、耳を飾つたガイルの少女



ポートモレスビーの獨木舟（土語でラカイトと呼ばれてゐる）

ココヤシ（ココヤシ科の高木で熱帯地方に多い）



ココヤシの実を使用する漁撈の時の姿勢

バターフィールドで捕虜

917
165

大東亞戰爭勃發して未だ半歲ならざるに大御稜威の下皇軍將兵の勇戰奮鬪と其の尊き犧牲とにより南方諸地域に於ける米英蘭二百年の牙城は一朝にして葬られ今や大東亞共榮圏の建設は我日本國民の雙肩に課せられた大使命となつた。然しながら多年米英の假借なき政治的桎梏と執拗なる經濟的搾取の機構の下に呻吟せる之等諸民族を解放して各々其の處を得しめ以て人類福祉の增進と世界永遠の平和に寄與せんとするは眞に容易ならざる大事業である。之が爲には一億一心不退轉の決意を以て聖戰目的の完遂に向つて勇往邁進すべきは素よりなるも、各地域に就て其の自然的、人文的事情に精通することが何よりも喫緊事である。

當協會は叙上の趣旨により夫々權威者に依囑して本叢書を刊

行するに至つたのである。而して本叢書の特色は內容の正確と行文の簡明とに在る。必ずや大方の御期待に副ひ得ることを信じて疑はない。

敢て一讀を勸むる所以である。

昭和十七年十一月

財團法人　日本拓殖協會

ニューギニア

目次

一、自然環境……一
　地勢、氣候、動物、植物
二、住民と習俗……三
　概說
　各說
　蘭領ニューギニア、委任統治領、英領パプア
三、統治……四七
　概說
　各說
　蘭領ニューギニア、委任統治領、英領パプア

四、ニューギニア發見並に探檢……五九
五、產　業……六九
邦人事業……六九
農業、牧畜……七五
鑛　業……九二
林　業……一〇七
水產業……一一〇
交　通……一一三
商業、貿易……一一三
六、主要都市……一三五
屬領ニューギニア、委任統治領、英領パプア
七、ニューギニアの將來……一四九
八、ニューギニアに關する文獻……一五五

一、自然環境

我國より南下すること四千六百粁の彼方に南洋群島と赤道を挾んで横はる大きな島がある。これがニューギニア或はパプアと呼ばれる世界第二の大島である。その形は鳥の如くで、屢々赤道下に不死鳥の如くに横はれると形容される。

太平洋の一角より頭を西に向つて擡げ、黎明のアジアを注視するかに見えるニューギニアは、永き眠りから今眼醒めんとしてゐるのだ。島と呼ぶには余りにも廣漠としたこの島の今後に占める地位は果して如何なるものがあらうか。

ニューギニア本島の面積は、我が本州、四國、九州、北海道に更に臺灣を加へた面積の優に二倍に相當し、約八十萬一千方粁である。主島の周圍に散在する島嶼は八萬五千方粁であり、北海道の全面積よりも多い。

東西の最大延長は二千三百八十粁、南北の最大幅員は六百五十粁である。

政治的には不死鳥の胴體に當る部分を南北に貫く東經百四十一度の子午線を境として、西部蘭領は、東部は英領に屬する。後者は更に分れ、北半は濠洲委任統治領、南半は濠洲屬領とな

にてゐる。本書に於ては前者を委任統治領、後者を英領パプアと稱し、單に英領パプアといふときは此の兩者を含むものと了解されたい。

地勢を概觀して先づ眼につくことは、一大高山脈地帶が東西を貫いて走つてゐることであらう。ニューギニアは地質的には今尙構造中であるといはれ、新生の岩石を以て蔽はれた中央高山脈は平地より突如として數千米の高處にまで聳え立ち、急峻な山脈と山脈との間、深い溪谷には激流が岩を咬んで流れ、終には大河となつて海に注ぐのである。

中央高山脈地帶には、蘭領に於てはスネウ山脈がこれに屬する。スネウ山脈はその名によつて推知される如く（スネウはオランダ語では雪を意味する——卽ち雪山々脈）概ね三千米から五千米の高峰を連ねてゐる。山頂は萬年雪を頂き、熱帶下白雪の太陽に映寫するさまは壯觀を極める。ナッソウ山脈、ユリアナ山脈等は何れもスネウ山脈の一部であり、西から東に走つてゐる。

前者には、本島最高峰、五千三十米のカルステンツ峰、四千八百米のイデンブルグ峰、四千七百五十米のウイルヘルミナ峰其他四千米を超える高峰が踵を接して連り、後者には、四千七百米のユリアナ峰、四千六百米のヤン・ピーテルス・クーン峰、四千五百八十米のプリンス・

ヘンドリック峰其他これらと略々同じ位の諸高峰が英蘭國境に向つて相連續し、その雄姿を誇つてゐる。

赤道直下では雪線は四千五百米より始まるため、右に擧げた諸峰の頂上は何れも四時雪に蔽はれてゐるのが遠くより認められ、探檢隊の齎した報告によれば、これらの諸高峰には氷河も存在するといふ。

國境を超えて英領に移ると、ヴィクター・エマニエル山脈、そのすぐ北側にはシャッテンブルグ山脈及びウエスト山脈があり、ステレン山脈は英蘭國境に跨つてゐる。これらのうち前二者及びステレン山脈は何れも三千米臺の高峰を有してゐるが、この地方は未だに未探檢の地方に屬し、僅かに最近アメリカ合衆國、ニューヨーク自然科學博物館の第二次アーチボルド探檢隊が、飛行機よりそれらの高峰の存在を認め得たにすぎない。

パプア灣とアストロラベ灣に挾まれる地帶は、山岳重疊として甚だ復雜を極め、山脈は島の中部を東南に走り、オウエン・スタンレイ山脈から本島最南端のクラウディ山脈に至つて姿を沒してゐる。

中央高山脈地帶の北部は、一度低下して所謂湖沼平野といはれる低地帶を形成し、次いで上

昇して群小山脈を形造り、そのまゝ直ちに太平洋の荒波の中に入りこむのである。

眼を轉じて不死鳥の頭部（フォーヘルコップと呼ばれる――卽ち鳥の頭の意）に至ると、東及び北部にはアルファック山脈、タムラウ山脈があり、何れも相當程度の山地である。

ニューギニアの河川の特徴は、右に述べた諸山系によつて容易に推察されるやうに、中央高山脈を境として北及び南に流れ、それぞれ太平洋及びアラフラ海、パプア灣に注ぐことである。

卽ち中央高山脈の北部では、ユリアナ山脈に源を發し、湖沼平野を貫流するマンベラモ河、（この上流はイデンブルグ川とルファール川に分れる）ヴィクター・エマニエル山脈より發して北部山系と中央高山脈の間を流れるセピック河があり、南部では、ヂグール河、エイランデ河、ローレンツ河等幾多の河川が網狀をなしてアラフラ海に注ぎ、フライ河がパプア灣に注いでゐる。

これらの諸河川は何れも探檢隊の交通路として利用せられるもので、小汽艇によるときは相當上流まで溯航が可能である。右にあげたもの以外に委任統治領では、セピック河々口に注ぐラム河があり、英領パプアでは、ブラリ河、キコリ河等の諸河川があることをつけ加へねばならない。

これらの諸河川に沿うてはそれぞれ平野が開けてゐる。殊に中央高山脈の南部には所謂南部低地帶といはれる廣大な平原が、アラフラ海沿岸に至るまで續いてゐるが、熱帶降雨氣候地帶のこの地方に於ては、平野とはいへ何れも千古斧鉞を入れぬ大原始林が、海岸に至るまで隙間もなく密生し、晝なほ暗き有樣を呈してゐる。それがため、未だに何等の開發も行はれず自然のまゝに放置されてゐる現狀である。

ニューギニアの海岸線は一帶に出入が少く、蘭領に於ては西部のマックルーエル灣、太平洋岸にはヘールフィンク灣、アラフラ海に面した南岸にはカムラウ灣、ラカヒア灣が、英領に於ては、東北部にアストロラベ灣、フオン灣、南端にはミルネ灣、トレス海峽に面した南部ではパプア灣が大きく入りこんでゐるに過ぎない。從つて、天然の良港として擧げるに足るものの極めて限られてゐることは、自から明かであらう。

島嶼としては、フォーヘルコップ西端のワイゲオ、ヘールフィンク灣にはスハウテン諸島に屬するビアック島、ヤーベン島其他の小島があり、マンベラモ河口の東北方には古々椰子で知られたワクデ島がある。英領には、本島の東北部にビスマルク群島があり、ニューブリテン、ニューアイルランド、アドミラルチー諸島がこれに屬してゐる。東南海面にはダントレカストウ

群島、ルーシエイド群島、其他無數の小島嶼、珊瑚礁が散在してゐる。このうちビスマルク群島は火山帶に屬してゐる。

ニューギニアは大體南緯九度の間にあるので、熱帶氣候であることは論をまたない。然しニューギニアの氣候を述べるには、海岸地方と高山地方には區別する必要がある。

海岸地方は熱帶氣候の特徴を示してゐるが、氣溫は海風の影響をうけて左程高くはなく、蘭領のマノクワリでは年平均溫度は華氏約七十九度、ホーランヂアもマノクワリと大體同じ位であり、英領パプア灣岸の主都ポートモレスビーは八十二度、ニューブリテン島北端のラバウルでは八十三度である。以上の如く海岸地方の氣溫は平均八十度前後であり、ニューギニア全島でこれまでに記錄として殘つてゐる最高氣溫は、ラバウルの九五・九度であり、他の地方を見ても何れも百度には達してゐない。最低氣溫は南洋興發會社のマノクワリに於ける調査では六十一度となつて居る。朝方には薄ら寒いと感ずることもある位で、ニューギニアが日本人にとつて決して住み難い處ではないといふことは、彼の地に暮したことのある人々の等しく强調するところである。

然し、單に氣溫のみでこれを論ずることは危險でもあり、雨量、濕度等に亙つても一通りの

觀察を行つて見ねばならない。

海岸地方の雨量は概して多く、マノクワリに於ける年降雨量は約二千五百粍、ホーランヂアでは二千三百粍、ラバウルでは二千三百粍であり、その他の處も大體千六七百粍から二千五百粍の間である。

ポートモレスビーは稍々少く千三百粍前後である。然し、處によつては海岸地方でも四千粍の降雨量をもつ地方も少くなく、ニューブリテン島南岸のリンデンハーフェンでは、實に六千五百粍に達する。

全島に亙つてみると、ニューギニアは熱帶降雨氣候であつて概して雨量は多く、一年中を通じて乾季と濕季の判然とした區別はたて難い。この地方は赤道から南部にあるため、五月から十月までは南東貿易風が吹き、十一月から四月迄は北西季節風が吹くが、地形上北海岸方面は後者、南海岸方面は前者の影響をうけることが多い。

濕度は多量の雨のためか概して高く、マノクワリでは平均九十%前後を示してをり、南岸の低濕地帶は總じて濕氣が多い。また北海岸に於ては、南洋興發會社が事業地を經營してゐるヘルフィンク灣奥地のナビレでは、灣内の濕氣を吸收するため濕度極めて高く、一度雨が降る

と恰も水をうつす如き猛烈な勢となり、從つて河水は何れも岸に溢れる位になる。

ニューギニアの高山地方は前述の如く高峻であるため、赤道直下にも拘はらず概して氣溫は低い。然し雨量は全般的に見て多量で、中央高山脈地帶では平均年降雨量は四千粍であり、その南部の一地方では七千粍に達する處さへある。高山地方は從つて雲がかゝり、霧が多く、日光の透光度が余り良好でない處も多い。然し、これは地勢の如何に左右されるのであつて、一九三八年、蘭領ニューギニアの中央高山脈地帶に於て探檢を行つたアーチボルド探檢隊は、飛行機上から、マンベラモ河の上流インデンブルグ川とハベマ湖との間を流れるバリム河の大溪谷に、耕地や草葺の住居のあることを發見し、推量によつて約六萬の住民が住んでゐると報告し、またナッソウ山脈の北にあるスワルト峽谷では、多數の住民の住んでゐることが知られてゐるが、これらは何れも人の住むに好適な氣候を示してゐるものと考へられる。即ち、濕氣を含んだ風は周圍の高山に突き當つて、そこに多量の降雨を齎すが、その蔭になつてゐる峽谷では雨は比較的少く、雲も霧も日光を遮ることが少い。それがために多數の住民が密集して住むことが可能なのである。

これらの事から高山地方は、我々が植民地を建設するに當つて注意せねばならぬ地方である

と云はれてゐる。

ニューギニアは英蘭兩國ともに未だ調査の手がとどかず、各地方に於ける氣象觀測は完備したものが誠に少い。從つてこのことは、土地の開發を行ふにしても、各地に入植して生活を營むにしても、極めて不便を感ずるところである。

從來、ニューギニアは惡疫瘴癘の地であるといはれてゐたが、最近は土地の事情も種々紹介され、その認識も次第に改つて來てをり、ニューギニアが非健康的であるとの觀念は次第に薄らぎつゝある。

然しなほ恐るべきはマラリアの横行であつて、マノクワリ、ポートモレスビー其他比較的よく開けた都市、村落を除いては、マラリアは一般に多く、最も甚しいのは南部の低濕地帶である。近年キニーネによるマラリアの治療法が進歩をとげた結果、歐人間に於ては罹病の危險は減少してゐる。從つて適當の健康の所有者であれば我々としても何等恐れる必要はなく、英領に於ては一般に蘭領よりも各都市に於ける醫療設備が完備してゐるに於てをやである。

次に動物界について見ると、これはニューギニアの地形的關係からして濠洲型のものとアジア型のものとの二つに分けられる。

前者に屬するものには先づ第一に有袋類中のカンガルーが擧げられる。このカンガルーは地上を跳るものと木登りするものとがあるが、濠洲型のものとその總てに於て一致してゐる。前者はジャングルに棲息し、一種異樣な臭氣を有するので容易にその存在を知ることが出來る。木の芽を常食とし、大きなものは全長四尺以上のものもある。土民は好んで食用に供し袋の中の仔まで食べてしまふ。肉は特臭があるので我々には馴れないと手が出せない。木登りするものは前者とは形態、顏貌等全く異つてをり、常に樹上に棲んでゐる。

アジア型に屬するものには、なまけもの、栗鼠、袋猫、野鼠、野豚等がある。これらはすべて土民の食用に供される。野豚は高山地帶を除き、丘陵性の地域や平地には到る處に棲息してゐる。海岸部落や開墾地に出沒して栽培物を荒しまわり、時として思はざる損害を蒙ることがあるので、土民はその畑の周圍に垣をめぐらすことが多い。農耕には注意を要する害獸である。

ニューギニアには獅子、虎等の猛獸は棲息せず、また象も居ない。鹿は昔時は居なかつたが最近非常に增加し、西部に多い。

鳥の種類は極めて豐富で、約六百種以上ゐるものといはれてゐる。最も有名なのは極樂鳥で昔はニューギニアといへば直ぐ極樂鳥を想像する程であつた。然し、單に極樂鳥といつてもそ

の種類は十數種の多きに上り、形態、色合、習慣等それぞれ別個の特徵を有してゐるが、何れもその艶麗な美粧は造化の神が特別に與へ給ふたもののうちの尤たるものである。その美はしい羽毛のため婦人帽の裝飾用として使はれ、往時は相當額の輸出をみたが、次第に減少して來たため、その捕獲は勿論、輸出することも禁止されたが、それ以前に捕つたものは賣つても差支へないことになつてゐる。けれども、それが爲に土民によるこの狩獵は衰微してしまつた。

極樂鳥は蘭領及び委任統治領に多い。勿論英領パプアにも居るが前者に比較すると少い。極樂鳥の習性として面白いことは、二十羽、三十羽と集つて舞踏をすることで、羽が換つたあと一番美しいときに木の枝に止つて踊るもので、丁度孔雀が羽を擴げて誇るやうな恰好である。

其他ニューギニアの特產として有名なものに王冠鳩がある。これは雞よりも大きく、扇型の美しい肉冠があるので極樂鳥の羽と同樣に裝飾用として取引されてゐたが、今は禁鳥となつてゐる。體の大きなものには火喰鳥があり、非常に巨大なもので、密林に廣く分布棲息し蛇鳥の如く地上を駈けまわる。大きなものは六尺にも達する。又、鵜・白ペリカン・蒼鷺、白鷺、紅鶴等が濕地や海岸等に棲息してゐる。その他鳩や鸚鵡は最も一般的であり、猛禽には多數の鷹鷲等がゐる。

鰐は到る處に棲息してゐる。殊に河川の下流水域、河口附近に好んで棲むが、極めて上流の河で幅三四米程度の溪派にも居ることがある。蜥蜴と守宮は多い。又蛇は普通に見られるが、毒蛇は無毒のものよりも少い。然し長さ一尺五寸位の毒蛇は灰色で尾はスポイトのやうに細くこの毒は猛烈であるため、土民はこれに咬まれると三十分位で死ぬるといふ。なほ前述の如くニューギニアは一般に濕氣が多いので山蛭が多く、大きいものはマッチの軸木位のものから、小さなのはピンのやうなものも居る。この小さいのは手拭の中に入つたりしてゐて、顏を拭くと眼の中に入つて苦しむことがある。住宅には他の東印度諸島に於けると同じく蟻も多く、寢てゐてこれに惱まされることは屢々である。

植物の種類も豐富で約六千種位ある。一說によれば實際には一萬千種のものがあるといふ。そのうち最も多いのは蘭科植物で、二千五百種もある。ニューギニアは地理的に見て濠洲に近い關係上、植物も濠洲型に似てゐさうであるが、寧ろマレイの方に似てゐる。

二、住民と習俗

ニューギニアの全人口は、一般に、蘭領ニューギニアが約三十三萬、委任統治領が約五十九

萬、英領パプアが約二十八萬、合計約百二十萬であるといはれる。然しこれは推定に留るのみであつて、未だに正確な數字は判明してゐない。

右の數字が正しいものとすれば、ニューギニアは一平方粁の人口密度は一・五人である。委任統治領は二・四六人、英領パプアは一・一四人であるが、蘭領に至つては僅か〇・八人にすぎないのである。擴大なサハラ沙漠を含むアフリカでさへ、一平方粁當り五人であることを思へば、以てニューギニアが如何に無人の地であるかを知ることが出來よう。

これらの住民の大部分は所謂パプア族と稱する人種であつて、他のマレイポリネシア人種とは毛髮、皮膚色、骨格等を異にし、人智未だ進まず、東南アジアに於ける最も低位の文化階級層をなしてゐる。然し、海岸地方の住民は奥地における未開の原始土民と比較すれば遙かに進歩せるものである。この奥地に散在して居住するものはネグリートと稱され、一般に矮小人種として知られてゐる。

本島の東方にはメラシネシア種族がゐる。これらは混血してをり、何處を以てその境界とすべきかは極めて困難な問題である。人種學、民族學及び民俗學的にもこのニューギニアは未だ全く未知の境であり、現在は僅かに、各地方地方の住民をその地の名稱等で呼んでゐるにすぎ

ない。

パプア人に就てその外貌を述べると、平均した體格を有し、身長は中庸の大さである。古來パプア人は巨大であるといはれたが、最近の測定によると、人類學上必しも大でなく、平均五十五糎から百六十糎である。幾分突出した顴、廣く鷲の如き鼻、厚い唇、外方に發達した大きな口、密生した眉毛、暗褐色の眼と白い齒を有し、皮膚色は黄褐色から暗褐色を帶び、或る地方例へば英領パプアの西部におけるパプア人は殆ど黑色を呈してゐる。然し眞の黑色はパプア人には見られない。彼等の皮膚色は暗黑の影の勝つた褐色であつて、色彩の薄いものも稀ではない。とはいへ、あらゆる地方に瀰漫せる皮膚病のために、彼等の皮膚色を正しく見極めることは困難であるといはれてゐる。

最も著しい特徴は毛狀の縮毛で、東亞の二大人種蒙古人及びマレイポリネシア人が、大部分直毛を以て知られる丈に彼等の縮毛は一層特異である。然しネグロの如く密生せず、多くは長くしてまばらである。

パプア人は小さな部落に住んでゐる。部落は數軒の家から成立つてゐるのが普通であるが、時には一軒しかないこともある。海岸地方で外來人と接觸する地方では多く定住の生活をなす

が、少し奥地に入ると彼等は轉々として食を追つて移つて行く。從つて探檢隊が前述の探檢に發見して地圖に記入した部落が、次の探檢時には最早見當らないことも屢々であるといふ。

家屋の構造は全ニューギニアを通じて至極簡單なものである。地上一二米の杙上に床を造るものから、樹上に高く居を構え恰も鳥の巢の如き觀を呈するものもあり、水邊地方では水中に杙をうちこんでその上に構築した家屋もある。これらの外に地面に直ちに床を造るもの等多種多樣である。

家屋は外から見れば一軒の家の如くに見えるが、内部には仕切りがあつて數部屋に分れてゐる。彼等は大家族で一軒の家に住んでをり、そのうちには通常父子兄弟等の數ケの小家族が一緒に生活してゐる。それらの家屋が數ケ集つて一部落をなし、更にそれらが集つて一種族を形成してゐる。

屋根は日本在來のものの如き恰好をしたものから、圓屋根、更に圓錐形のものまであり、主として竹又は木を以て骨組を作り、之に枯草、椰子、サゴ樹等の葉或は樹皮を以て屋根及び壁を造つてをり、屋根は屢々一種の破風がある。杙上家屋では梯子を以て出入する。

彼等の衣服及び裝飾に就て見ると、歐人と接觸する以前に於ては、男は僅かに陰部を蔽ふて

ゐたに過ぎなかつた。時には全く全裸のことも稀ではなく、現在でも蘭領ニューギニア、センタニ湖畔等で所謂全裸の土民を見かける。女も同じく陰部を僅かに蔽ふにすぎなかつたが、これ又全裸のものも少くない。男の陰部蔽ひには多く草や樹皮で作つた褌や、竹片、貝殼、果實の中味を取り去つた莢や筒等を使用して居り、これを陽根筒といふが、その長いものになると胸にまで達してゐるものもあり、甚だ奇觀である。

然し、海岸地方の歐風に馴染んだものの服裝は幾分進歩し、サロン（一種の腰卷）をまとふてゐるが、上半身は何れも自然のまゝである。

衣服が乏しいのに反して身體の裝飾物は多種多樣であり、仲々發達してゐる。殊に著しいのは頭髪を飾ることで、縮れた毛髪を分けて、これに石灰或は黃土を塗り、大型の竹製の櫛をさしたり、鳥の羽、殊に極樂鳥の羽で美麗といふよりはむしろ毒々しく飾つてゐる。またキルク拔狀に卷いて隣りの螺旋を搦ませ辮髪をつくる。その典型的なものは正に工藝品に近いといはれる。更に前額には貝殼のついた鉢卷をしめて意氣揚々たるものである。平時は左程でもないが、祭時になると甚だ大仰に飾り立て、頸の周圍には貝殼、犬の齒、魚の骨等を寄せ集めた頸飾りをつけ、頸から胸へと垂した袋には細々した必要品を入れてゐる。

鼻膜を穿つてそこに木の棒や牙等を通し、耳垂に穴をあけて耳飾りをつけることは一般的である。

文身は廣く行き渡つた習慣であつて、石片を以て肉體に傷痕をつけ、石灰及び木の葉の汁を混じてこれに塗り、傷痕を增々大ならしめてゐる。この文身の模樣は種々あるが、自族はよく似た印をつけ他と判別し易いやうにする。

パプア人は性甚だ懶惰にして、能ふ限り勞力を吝むといはれる。彼等の文化程度が未だ極めて低く、殆ど石器時代を出ない狀態にあることを考へればむしろ當然な事であらう。

概して男と女との仕事上の區別は判然としてゐる。勞役に從事するのは主として女であり、男は狩獵、魚撈等を行ふ。彼等は主として鋭く尖した石器を用ひて森林の開拓から日常の必需品を作るにも使用してゐる。

畑作は到る處に行はれるが、通常野生食用作物の補充とするにすぎない。その畑作の狀況に就て述べると、海邊にあつては海岸に平行して椰子園を設け、時としては良好な手入をなしてゐるものもあるが、自然の狀態に任すものを見れば恰も野生林の觀がある。部落內若くはその附近には根菜類、球根類、豆類、胡瓜類、煙草、蕃椒、雜草等を植え、時として芭蕉、檳榔子、

古々椰子、サゴ椰子を植えることもある。

内地に於ても略々これと同様であるが、排水方法は多少異り、前者に認められる幾分組織的な灌漑組織がない。サゴ椰子は内地に於ては沼澤地にもあるが、多く小河の沿岸にある。これは多く南ニューギニアの割合に進歩したパプア人間に見られるものであつて、他の處に於けるものとも大體似たり寄つたりの狀態である。然し、多くはサゴによつて命を繋ぐのが普通であり、野生のサゴ椰子を伐採し盡せば次のサゴ椰子野生地を求めて移住してゆく。この漂浪民の最も典型的なるものは蘭領に於けるタルガレー族である。

右の如く、サゴ椰子は最も重要な彼等の食物であるが、尙その外に多くの芋類をも食ふ。パプア人は野生人ではあるが、菜食者ではないから狩獵は重要なる生計の道である。何等の擇好みもせずに、爬行するもの、歩行するもの、翔ぶもの、皆總て食物となる。然し主食となるものは豚、駝鳥等や鳥類である。

また彼等は海岸、河川に於て魚をとるに功みである。狩獵をなすには弓矢を用ひ、各種の係蹄、陷穽をも使用する。牧畜といふ程のことは知らない。尤も棧上家屋の下に豚や雞を飼ふことがある。

煙草は嗜好品のうちの尤たるものであり、大抵の部落にはこれを植えてゐる。煙草はシガートの形に作り、口から口へと渡して喫むのである。時としてはパイプを使ふこともある。このパイプは短い形のものもあるが、竹の管を切つて一端に近い方に穴を穿ち、その穴にシガーの一端を挿込む。これを喫ふときには竹管の一端を手で塞いで喫ふのである。またシリ（嚙煙草）を嚙むことも一般に行はれる。酒はサゴから作つたサゴ酒を飲むが、一村を擧げて酩酊してゐるのを見ることも再三ならずあるといはれる。

武器としては彼等は、通常弓矢を携へてをり、接戰兵器としては最も原始的製作品である槍棒、短刀を有するのみである。住民が全く武器を携帶しない地方も亦少くない。外國人が狩獵をなす處では到る處に銃器がある。更に防禦用の武器としては往々藤を編んで作り、または木で作つた楯がある。

ニューギニアの弓はそり返しがなく、委任統治領のものは椰子樹を用ひて作り、英領パプアのは藤の弦を張つた竹製である。弓には何等かの彫刻がある。矢は竹製で、竹管のものが多くそれに木又は竹で作つた鏃があるが、時には骨鏃もあり、魚獲用には多數の鈎のある矢を用ひる。槍は椰子樹或は竹で作られてゐる。楯で一般的な形は心臟形、及び四角形の彎曲した楯で

上端に切込みがある。

部落の周圍には防禦を設けてゐない。然し處によつては高さ二米ばかりの柵を廻らすこともある。家屋そのものが若干防禦の性質を備へてゐる場合が多いことから見ると、パプア人の戰法は頗る低級なものであることが知れる。樹上家屋は最も防禦的のもので、ボンゴ地方の住民等は藤の梯子の助けを借りねばならぬやうなところに生活する。

パプア人が日常使用する物品には、武器の外に石で作つた斧、小刀の類、貝殼を磨り切つて作つた刄物、骨を尖らして作つた利器等があり、鐵が紹介されるまでは彼等はどんなに大きな木を切るにしても總てこれらの石の器具を使用した。パプア人が所謂石器時代に住んでゐるといはれる所以である。然しまた椰子葉の纖維を利用して袋や籠を編み、粘土から鉢形や壺形の土器をも作つてゐる。

彼等が火を起すには二通りの方法があつて、一は軟木の板の上で硬木の棒をまわし發火せしめるものであり、他は藤の棒を木の棒或は竹筒に當てゝ鋸のやうに動かして火を得るのである。何れも摩擦によつて發火せしめる原始的なものである。

交通手段としてパプア人に無くてはならぬものはカヌーである。最も原始的なカヌーは木を

切り倒し、幹に凹みをつける。海岸地方ではこのカヌーは遠距離に航行することもあるため奥地のものよりは相當進歩してをり、カヌーの兩側又は片側に浮木をつけて舟の安定を計つてゐるものが多い。兩側についたものの方が古くからあつたと考へられてゐるが、一般的には片側丈のものが多い樣である。この浮木は舟から二本乃至數本の腕を出してその先に取つけられるものである。舟體には木を組んで櫓狀にしたものや、帆柱をたてゝ椰子やタコの木等からとつた纖維で網代に編んだ帆を有するものもある。舟腹は彩色をほどこしたり、彫刻をしたものもある。彫刻も一概には云へないが、仲々雅趣に富んでゐる。舟の舳艫には飾物をつけ、極樂島や、魚や、木等になぞらへたものが多い。

パプア人が歐人探檢隊や旅行者等に敵對行爲を見せるのは主として彼等の盜慾に基くものと思はれる。他種族に對する大規模の却掠又は首狩は、古來廣く行はれたのであるが、現今はキリスト教會の感化によつて終熄してゐる。この首狩の風習は南海岸地方に於て特に多く行はれ、未だ命名せざる一男兒のために名を求めることを目的としてゐたといふ。また彼等の盜慾は西ニューギニアに於ては首狩りの原因となつてゐる。この首狩りのために他部落を襲擊することがあるが、多くの場合には田野に働いて居る無防禦の者の背後に忍び寄り、老弱男女の區

別なくこれを射倒し、又は打ち倒し、その名を問ふた後に首を刎ねるのを例としてゐる。

鹹取した頭蓋は特別の方法で調製して、家屋の中に保存する。ニューギニアの他の地方ではこの目的が果して命名のためであるか、頭蓋骨の所有者に隷屬する靈魂の表示としてこれを保存するものであるかは明かでない。或場所に於ては首狩りはむしろ競技の一種として行はれるものの樣で、携行した頭蓋は、首狩者の勇氣を表はす戰捷記念と見做されることがある。他部落との戰爭の際に敵の首を切り取つて故鄕の村に持ち歸り、其のまわりで舞踏を行ふこともやはり、かういつた種類のものであらう。

人肉食用の話は諸地方で聞かれた。嘗て醫療傳道協會の宣敎師と稱する者が、南ニュギニアに於て一年間捕虜となつて過ごしてゐるうちに、祝宴の膳に人間の肉の上るのを目擊したといふが、これは確かなことではない。然し食人に關してはその形跡が認められぬこともないのであるが、現在では殆どその跡を絕つてゐる。

西ニューギニア及びヘールフィンク灣に於ては、往時奴隷制度が廣く行はれ、一九〇二年頃までは若干の奴隷が存在してゐたが、それら奴隷たちの運命は悲慘を極めたといふ。然し現在は最早見られない。

首狩り、食人等の野蠻なる行爲は、概ね彼等の宗敎觀念に基くものである。卽ち、パプア人の間には精靈崇拜、トーテム崇拜等が行はれ、キリスト敎の傳道によつても仲々舊來の習慣は改まらない。

海岸地方に居住するパプア人は多く回敎を奉じてゐる。然し、眞に回敎に歸依してゐるものは少く、單に開化民たることを誇らんがためにその眞似事をするのであるといふ。

土民の間にはマノインなる信仰が一般に行はれてゐる。それは靈的物質たると無生物たるとを問はず、總ての物の中に存在すると彼等は信じるのである。これは地下だとか、谷間だとか、密林に棲息するものと思はれてをり、靈魂が占居する地點は多く禁斷地となつてゐる。

このマノインなる信仰は所謂狼憑きの如きもので、これに罹るとその人間は身體から靈魂を衷ひ、動物の形又は人間の容姿をして夜半に彷徨し、その仲間を殺すのであるといふ。この信仰は最も空想的な形態をとり、無數の爭ひ、殺人、首狩り等の原因となつてゐる。

一九一五年、ムニベルから來た或る土民がワフォルドリ河流域サゴ園で毒蛇に咬まれて死んだ。毒蛇に咬まれるといふことは極めて稀な例であるが、ムニベル村は農園所有者に死んだ男の血代を要求した。卽ちその蛇はマノインであつて、農園所有者の家族の誰かが狼憑きである

といふのである。勿論農園主は血代なぞを拂ふことを拒んだ。それがため早速土民達に襲撃されて家族は全滅の憂き目を見たのであつた。

また、スワンギと稱する信仰があり、到る處に行はれる。パプア人は自然死の存在を信じない。これを他人の怨意に歸し、その非望を遂行せんがために大空の毒を使用する結果であるとするのである。

南海岸地方では、マヨ教が行はれる。ビアモンド附近の若干部落ではイエモ教を、又或る種族はアラッパ教を奉じてゐる。

マヨ教は豐年の祈願を目的とするものの如くであり、それを信ずる住民は、毎年マヨなる出生部落から離れた處に建てられた精靈の家に參詣し、祭祀には參列せねばならない。祭禮は旱魃季に行はれ、五六ケ月間繼續するのが普通である。

また一般に妖術、幻術も流行してをり、それを行ふ術師は住民より認められてゐる。これはパプア人の社會生活に常に大なる惡影響を及ぼすものである。

然し、右の如き單なる原始的狀態のみならず、若干宗教的形式を備へた一定の慣習が、かなり廣範圍に行はれる二地域がある。一は委任統治領境界よりアパワル河に至る海岸地帶で、こ

の地方では殆ど各部落毎に一宇又は數宇の社がある。他はセンタニ湖より發するタミ河流域に於けるものである。其他社のみはマンベラモ河流域にも若干存してゐる。

この地方では社の祭事に笛を用ひるが、男ばかりで、女及び兒童は加入することを許されない。殊に女にとつて笛は怖しきものとなつてゐる。その理由として次のやうな話が傳はつてゐる。

昔々二人の女があつた。或日海邊を歩いてゐると若干の竹を見付けた。その形が奇異なのに魅せられて試みに息を吹き入れてみると微妙なる音を出すことが判つた。兩人はこれを自己の部落に持ち歸り、他の女たちにもこのことを告げ、男子の眼には入れないことにしようと相談した。その夕べ、祝宴を催したときに妙なる笛の音が四邊に響き渡つた。女たちは單に普通の集會であるかの如くに粧つて竹を鳴し、男たちを瞞着しようとしたが、一人の男が竊かに忍びよつてこれを觀てとつた。男たちはこれを彼等の間で占有しようと望み、女は若い娘を除いて盡く殺さうと計つた。この計畫は直ちに實行に移されたのであつた。それ以來、神秘の笛は永久に女たちの恐怖するところとなつたものであるといふ。

パプア人の祖先崇拜が一般にどの程度であるかは不明であるが、これまでに集められた木像

や假面等を見るとその一端を覗ふことが出來よう。尤も、この木像は宗教觀念に多大の關連を有するもので、護符や呪物としても使用される。ニューアイルランドの北西部に於ては毎年五月から七月にかけて死者の冥福を弔ふために、一種の公開祭を行ふ。その際使用する彫刻物と假面とは、ある秘密の場所で作られ、そのうちの二三のものには俗人の眼に觸れることを許さないものがある。蘭領ニューギニアに於ても各地で人體像が發見されたが、これらの裝飾品は祖先崇拜の發生の經過を示してをり、彫刻藝術の發達と、これと如何に密接な關係があるかを知るには極めて興趣深い土俗品といはねばならない。これらの木像は何れも土民の考へる最善の理想的人物型を表したもので、その細部は何れも土民の神話、傳說を具象化したものである。人體像に動物の像が附加されてあるものはトーテム徽號及び惡靈を表したものと考へられるが、彫刻の意味を知るには先づ彼等の傳承が理解されねばならない。

結婚は多く賣買婚である。勿論兩親の承諾を得ることは必要である。妻を娶らうとするものは旅に出て、意に適つた女に逢へばこれに近づき下腕の一を握りしめる。女が劇しく抗ふのをおし倒して一方の乳を掴むことに成功すると、これを逃がせてやる。女は泣き叫び乍ら家に入り家族にこのことを告げるが、乳を掴まれたことは既に結婚を意味してゐる。男が後を慕つて

女の家にやつて來て、兩者の間に話が纏まると代價を拂つて女を速れて歸るのである。代價としては種々のものがあり、例へばヘールフィンク灣のヤビ族ではカプルといふ一連の小貝殼をこれに使用する。其他皿等も用ひられるが、最近は貨幣を以てこれに代へることもある。

然し、單に賣買のみならず相愛によつて成立する結婚もある。掠奪結婚も行はれるが、余り一般的ではない。結婚は一夫一婦が原則的であるが、處によつては一夫多妻もあり、女の少い地方では惡習のある處もある。然し一妻多夫制は見當らない。

委任統治領では昔土民間に嬰兒殺害が恐るべき範圍に於て行はれたことがあつた。現今は余り見られないが、墮胎は尙行はれてゐるものの樣である。

死者の取扱ひは多く彼等の宗教觀念によつて左右される結果、埋葬は極めて注意深く取行はれる。死骸は彩色され、種々な裝飾品で飾り、儀式のやうな事を行ふが、キリスト教徒、回教徒に見られる如き埋葬は少い。死骸を森林中、又は水上に設けた架臺、若くは假小舍の中にをくのは最も一般に見受けるところであつて、英領ではその例が多い。蘭領ビントゥニ灣地方の葬風を見ると、死骸は死後四日間は家屋内にとゞめ、その後小舍に移し、細い竹を曲げて作つた簀上に一定の姿を保たせて安置する。簀の下に棕櫚類の廣い葉を垂し、死體から滴れる液汁

を吸收させる。死體は分解作用を起し、臭氣は誠に耐へ難い。二十日の後骨を集めて箱の中に收め、家の中に藏ふのである。彼等は死者をば少しも恐れない。何故ならば、彼等は死んでも尙自己の同胞であると考へるからである。

パプアの言語は他の東印度諸島に於けるインドネシア語族とは趣を異にし、言語學では一括してパプア語と稱してゐるが、未だその全般に亙つて詳細に調査したものはない。探檢隊が新たな部落に接する毎に耳馴れぬ言葉を聞くことから見ても方言の發達してゐることが判る。

蘭領に於てはヘールフィンク灣からフォーヘルコップの西岸まではヌームフォール語、オニン半島では轉訛したセラム語が、南部ではマリンデ語が話される。英領パプアのフライ河附近ではモツアン語が普及してゐる。

蘭領の海岸地方ではマレイ語が次第に共通語として使用される樣になつてをり、英領では政府が英語を普及せしめる政策をとるため、歐人と接觸する地方の土民間にはピヂン英語が通ずる。一歩奥地に入るとこれは通用しないが、身振言語はよく發達してゐる。パプア語は未だ固有の文字を持つてゐない。

數の觀念は極めて乏しく、或る地方では五以上は解することが出來ず、多數といふ。

パプア人は一般に老幼の外は自然の死を遂げるものでないと固く信じ、疾病、災厄、地震の如きは總て惡靈と妖術の作用によるものとする。從つて醫術に關する智識も極めて低い。病魔驅攘の手段は妖術と人間及び惡靈の崇りとを除くにありとし、歐人と接觸を保つ地方の土民すら醫師を迎へることをしない。それ故土民の健康狀態は一般に良好ではない。

風土病として先づ擧ぐべきはマラリアであらう。この媒介蚊たるアノフェレス蚊は南ニューギニアには極めて多い。北ニューギニアにも到る處に棲息するのを見るが、主要都市ではその開發に伴ひ、次第に少くなつてゐる。パプア兒童がこれに罹ると殆ど總て脾臟肥大を起す。彼等の腹の脹れてゐるのはこれもその一つの原因であらう。パプア人は幼時に既にマラリアに感染するものの如くであるが、成長した後は免疫になる。高山地方はこれは少く、例へばゴライアス山脈中のトサリに於ては絶無である。

脚氣は土民間に於ては一般的ではない。ヴィタミンに乏しいサゴを主食物とするにも拘はらず、新鮮なる植物性及び動物性食物を攝取するためであらう。各地の牢獄に於て一時土民間に脚氣患者が續出したことがあつたが、調査の結果白米がその原因なることが判明してゐる。

天然痘は時に猖獗を極めることがあるが、外來人との接觸によつて輸入された疾病であると

されてゐる。蘭領ニューギニアに於ては一九〇八年、ソロン、サラワチ、ワイゲオ等に流行しソロンに於ては人口の三分の一がこれがために死亡し、また同年マノクワリ、スハウテン諸島にも擴がり、一九一〇年には北ニューギニアを襲ひ、一九一七年にはソロンの諸地方に再び大流行を來した。

皮膚病はパプア土民間には非常に多い。彼等は殆ど裸體にして地上のありとあらゆる惡影響にさらされ、しかも全く皮膚を清潔に保つことをしないからである。象皮病はそのうち最も多いものである。

花柳病はニューギニアが他より輸入した疾病の一である。從つて未だ外界と交渉のない地方には存在しない。野蠻なる結婚の風習とこの疾病との間には大なる關係がある。南海岸に於ては花柳病は速かに蔓延した結果、兒童の死亡率は極度に達し、諸部落に於ては兒童を見ることは極めて稀であつたといはれる。

其他腸疾病は少いが、不潔な家屋に住み、惡食する土民間には赤痢が流行することがある。呼吸器病も割合に少いが、レウマチスは氣溫の變化甚しく、且つ沼澤地の多い地方では著しく多く關節を患ひ、時に筋の萎縮を伴ふ。

イ、蘭領ニューギニア

當領の土着民はメラネシア系に屬するが、總稱してパプア族といはれる。

アンペルバーケン人は北海岸のアンペルバーケン地方に住んでゐる。ニューギニアに於て稻を栽培する唯一の種族である。

アルファック人はフォーヘルコップの同名の地方に住み、パプア人の特徴をよく示してゐる。家屋は海拔二百五十米の山背の傾斜にあつて、一方からのみ出入するやうに作られてゐる。部屋は一つしかなく、地上五—七米の高さに床を造る。從來島內隨一の兇暴な種族といはれ、二三十年前までは首狩りの習慣を有してゐた。彼等の奇習中の奇と稱すべきは死者に對する迷信であつて、惡靈の仕業なりとし、それを移したものを詮議する。屍を木柵の上にのせ火焙りにし死體より出る油を親族及び其處を通り合はせた者に呑ませ、不潔物を吐出した者が惡靈を移したものであるとして其場にて殺され、吐出さない者には弓矢を供して待遇する。自村中に不潔物を吐出す者がゐなければ他の種族の仕業として隣接土民を襲ひ、首狩りを行つたものであると傳へられる。

マネキョン人はマノクワリの奥地アルファック山腹よりヘールフィック灣西岸のワンデシまでの奥地に住み、男女共褌一つで衣服を纏はず、性兇暴であつたが、最近は次第に從順となり、共同開墾に從事してゐる。

ボンベライ半島の南側にはルムバティ、パティビ、スカル、カパウエル及びアルグニなる住民がゐる。頭髪は余り長くなく箒頭にすることはない。また鼻は廣く、多少つき出した口と眞白な齒をもつてゐる。身體は中庸の大さで、皮膚色はやゝ淡い。サゴを常食とする。結婚は家長が實權を握つてゐる。結婚の代價は他處より多く、完全に支拂ひの出來ぬ花婿はその完濟まで一種の勤勞奉仕を行ふ義務があるとされる。邪教を信じ、イスラムは一般的でない。

これら西ニューギニア奥地の住民を一般にアルフールと稱し、海岸の住民は自己をパプアと呼びアルフールを劣等視するが、この兩者の間には文化的に相當の差がある。パプア人がアルフール人を蔑視することより見れば、パプア人は少くとも外より移住して來たものと考へられる。一説によれば東印度に於てはその原住民にしてマレイ人のために奥地に追ひつめられたと云はれるものがある。これをインドネシア人と稱し、パタック、ニアス、ダイア、アルフール等はその代表的なものである。所謂インドネシア人とマレイ人との形態上の差別は必しも顯著

ではないが、パプア人が縮毛なるに反し、これらは仲直であつてパプア人とは全く異つてゐることが判る。この説ではアルフール人はインドネシア人種の血統のやうであるが、恐らくこのアルフールなる名稱は社會的狀態に關聯した一の綽名にすぎないのであらう。

アルグニ灣から東方にかけた一帶のうち、中央高山脈地帶の南斜面卽ちナッソウ山脈中に於ては、所謂矮人といはれる自體の短小な住民がゐる。探檢險がミミカの奥地海拔六百米内外の處にて發見したもので、タビロとペセヘムの二者に分つが、前者は余り知られてゐない。ペセヘムはローレンツ河とノールドウエスト河の間に住み、この地の主である。身體は多く毛で蔽はれ、人口は約七百内外といはれ、部落には五—二十位の家屋がある。家屋は總て山の背にあり、床は人間の背丈位の棧の上に造られてゐる。低い扉があつて中に通じ、中程に貯藏所がある。家屋の後側には小さな園ひがあり夜間豚を入れるに使用してゐる。未婚の男子のために三四米の直徑をもつ圓形の家屋がある。ペセヘムは農耕を知り、家畜を飼ひ、狩獵を行ふ。主食物は芋類であり、よく手入れされた畑には二三の野菜、胡瓜、バナナ、煙草、甘蔗等を植えてゐる。ペセヘムの長はないが、部落は年とつた者が權力を握つてゐる。野外勞働は女がするが家庭ではその地位は相當高い。ペセヘムの男はペセヘム及びモルブの女と結婚せねばならぬと

いふ規則があり、ベセヘムの女とモルブの男との結婚は禁止されてゐる。彼等は性溫和にして平和を好み、他の種族に較べると智能は多少進んでゐる。

南部のプリンセス・マリアナ海峽から國境までの間には一大種族をなすマリンデ・アニム族所謂カヤカヤと呼ばれる種族がゐる。このカヤカヤなる語は、彼等が他人種と交易しようとして面會したとき口々にカイカイと叫んで挨拶する習慣から由來せるものである。外觀は强靱なるかに見えるが人口は增加しない。これは前述の結婚の惡習及びマラリアが原因である。縮毛で頭髪は上に捲きあげてゐる。耳飾りは普通で男は鼻の間に棒を通してゐる。家屋は海邊に一列又は二列に海に向つて立並んだ小さなものである。男又は女丈の家があり、別々に暮す。部落内は清潔で、塵埃は燒くか部落のうしろに捨てる。河に沿つた砂丘にはココ椰子を植え、その長さ五六粁に及んでゐる處がある。部落の畑には芋類、煙草、野菜類があり、時としてはバナナ又は檳榔子を見受ける。

トーテム崇拜は彼等の間では絶對的であり、マヨ教、イエモ教、アラッパ教等がある。

この地帶の北部卽ち南海岸から約六千粁の奥地には、異つた言葉、宗教、習俗をもつ種族がゐる。この地域はマリンデ・アニムの首狩りの地域である。首狩りは一般的ではないが、時に

は二三千人より成る一群が森林や沼澤を縫つて一大遠征を行ひ、女子供や食糧品を掠奪してくることがある。

ヌームフォール人はヘールフィンク灣及びその附近一帶に最も廣く分布してゐる。スハウテン諸島の住民にして、フォーヘルコップ、ドレ灣北部、ヤーペン島北部、ヌームフォール島、ルンベルボン島及びローン島に擴がり、灣岸地方に住む他の種族と混血してゐる。暗色の皮膚、大きな突出した口と厚い唇を有し、中庸の身長を有する。服裝は進化した方であり、女は未婚既婚を問はず腰卷を着用してゐる。主食物はサゴである。サゴ椰子は廣大なる沼澤地に密植され、ココ椰子は海岸に植える。海は魚類、龜類が豐富で、森林は鳥や野豚を豐富に供給する。

彼等の家屋は普通水上に作られ、長方形をなしてゐる。中央には通路があり、その兩側に家族の部屋が並んでゐる。多くの部落にはルムセラムと呼ぶ小舍があつて結婚期の青年を入れ其處に寢とまりをさす。普通の家よりは小さく、龜の子のやうな屋根をもち、二つの入口がある。男はこのルムセラムに入つて初めて一人前となる。男がこれに入ると、その家族は食糧や結婚の贈物に用ふものを運んでくる。結婚は賣買結婚で支拂さへすれば何人の女でも娶ることが許される。屍は普通部落の後に埋られ石標を置いてゐる。

ヘールフィンク灣の最も奥地ウェイランド山脈の北部にはヤビ族と稱する最も原始的な種族が住み、未だ石器時代を脱せず、身に一絲をも纒つてゐない。またワイナミ、ワポンガ兩河の奥にはタルガレー族が住み、遊牧の民で一定の居住地及び家屋を有してゐない。一族、犬、豚等を引連れて山より山へ移り、食物のある間は坐して食ひ、食ひ盡せば又何れかへ去る。

次にマンベラモ河から東方英蘭國境まででは、先づ第一にフンボルト灣岸のパプア人をあげることが出來る。體骼は殆ど他のパプア人と異るところがないが、幾分毛深く、殆ど裸體で歩き廻つてゐる。頭髪は編み上げてをり、時として花を挿してゐることがある。祭時には煤、粘土、石灰等で黑、赤、白に身體を彩色する。

東方に位置する部落の住民はセコといはれるが、男は多く陽根筒をつけてゐる。家屋は八角形で、大きな桟の上に作られてゐる。またカルワリと呼ぶ寺院の如きものがあり、狩獵又は漁撈がうまく行くとこゝで盛大な祭事を行ふ。彼等は航海者と稱することが出來よう。細長い小舟を操つて野豚、石器類、種々の飾物等を交換するために、更に東方の諸部落まで大航海を行ふのである。

次にはセンタニ湖畔のパプア人がある。センタニ湖畔は北海岸地方のうち人口の最も稠密な

地方である。全く原始的で進化してゐないが、他の何れの種族よりも勝れた特質を有してゐる。湖畔の主要な部落はアヤボ、アセ、アセール、ブエ、イフアル及びセスールで、人口は概算一萬であるといはれてゐる。

彼等は全く文字通り裸體のものゞ多い。家屋はフンボルト灣岸のものよりも一般に大である。多く水上に造られ、イフアルには普通の形狀のカルワリがある。それぞれ獨立した男又は女のための家があり、アヤボには長さ五十米に及ぶものすらある。彼等も亦航海者である。住民は各々一隻のカヌーを所有してをり、近くの木を切り出して來て小綺麗な型に作り上げるのである。

マンベラモ河流域に於けるパプア人はヘールフィンク灣の北部に横はる諸島、特にスハウテン諸島、パデアイド諸島から來たものであり、纖細な骨格と小さな手、足をもつてゐるのと、巨大な頭髪によつて容易に識別される。マンベラモ河の支流イデンブルグ河に沿うては、こゝにも全裸の住民が見出される。

土着民以外の住民を見ると、歐人は約二百八十名、支那人は約二千名、混血兒が約五百—七百名位である。但し統計に示されたものでないから正確を缺く虞れがあるが、以て一般を覗ふ

に足りよう。

歐人中大部分を占めるのはオランダ人で、ドイツ人がこれに亞ぐ。オランダ人の大部分は官吏及び事業會社の社員並に宣教師である。ドイツ人は以前の獨領に住んでゐたものが大戰の結果、英國に追はれて當領に移つて來たものと、小企業者並にフェニックス會社解散後當地に留つたものとである。

支那人の推定數は少い感じがないでもないが、東印度地方に於ける他の華僑の如き勞働者は僅少で、各主要都市、部落に於て商店を經營してゐるものである。

ロ、委任統治領

當領は大別して本島と各島嶼とに分つ。本島の部分には、パプア族、メラネシア族、ネグリート族がをり、ニューブリテン、ニューアイルランド、ニューハノーヴァー、ブカ、ブゲインビル、マヌス等にはメラネシア族、パプア族が壓倒的に多い。アドミラルチー諸島北方にある若干の島々にはミクロネシア族が住み、本島東方にある離島ではポリネシア系の特徴を示してゐる住民が見られる。ネグリートは多く山間に住む。

結局のところ、當領にはパプア族、ネグリート族、メラネシア族、ミクロネシア族、ポリネシア族がゐることになるが、勿論雜種も多い。主要なる種族を擧げると、ワラブ、シッサヌ、トゥムレオ、モヌボ、ボウム、フペブカナ、ヤビンの諸族である。

サマライからセピックに至る海岸地帶は總てパプア族が住む。彼等は典型的な太洋洲の住民であつて、縮れた髪の毛、褐色がかつた黑色の皮膚、むしろ高いと思はれる程の背丈長徑頭顱、而して凸出した鼻と後退した前額の所有者である。

彼等は東方に進むに從つて他族と混血してゐる。原住民が自己古來の言葉を保存してゐる場合にパプア人と呼ばれるのである。このパプア人はまた海岸に住んでゐる外に、パプオメラネシア族の到底侵入出來ないやうな奥地に蟠居してゐることもある。

パプオメラネシア族は體格上他種族と異り、皮膚色、頭髪の捲縮、骨格等他種族と相違した點が多く、種々雜多な言葉を話してゐるが、オーストロネシア語を用ひる移住民と、パプア語を話す原住民との混血したものをかく名付けるのであつて、オーストロネシア族の一派たるポリネシア族よりも語彙及び文法等に於て合致性が少い。この移住民はニューギニアの外廓に住んでゐたが、オーストロネシア語を話す種族は次第にモロベ區の奥地に踏み込み、マーカム河

流域に於ては約百六十粁も深く侵入してゐる。

ビスマルク群島に屬する諸小島は、パプオメラネシア語を用ひる種族によつて支配されてゐるが、マダン北東方のカルカル島、ニューブリテン島の西方にあるウンボ島には主としてパプア語を話す種族が住んでゐる。

ブゲインビル島及び小離島には種々雜多な言葉を用ひる種族がゐるが、一般にパプオメラネシア族が多く、同島沿岸にはメラネシア語を話さぬ住民がゐる。その居住地は沿岸まで續き、パプオメラネシア族を切斷する境界を形成してゐる。

ニューブリテン島に於ては北東の山地を除きパプオメラネシア族は到る處に住んでをり、この山地でパプアといはれるのはこれである。またニューアイルランド、ラボンガイ及びアドミラルチー諸島の南部等にも住む。

ブゲインビル島東北方の海上にあるタク島に於ては純粋なポリネシア族を見ることが出來る。元祖であるポリネシア族の要素が、當群島に居住してゐた種族の中に混入してから既に何代も經てゐる今日でさへ、蒙古小兒斑があり、純粋のポリネシア族でサモア群島及びその隣接諸島の住民に發見されるものと同一である。

ブゲインビル島北東方の離島、特にチグリア、タク、ヌクマヌの三小群島に於ける住民にはポリネシア族の特長が見られ、ヌクマヌ諸島の土民はミクロネシア族の特性が多く、ポリネシアのそれは餘り目立たない。

ニューアイルランド北方のエミラウ島に於ては、言語、體格、文化等に於てポリネシア族の近親を發見する。過去に於てはパプオメラネシア族が優勢であつたので、ポリネシア族の侵略はタク島程範圍が廣くなかつたと思はれる。ポリネシア族の血をうけた跡は、南東ブゲインビル、アドミラルチー諸島、ビスマルク群島の數ケ島に見ることが出來る。

當領のポリネシア族は數百名にすぎず、混血ポリネシア及びパプオメラネシアの血をうけた土民は現在二萬以上に及んでゐる。

マヌス區の北西方に散在する諸島に住むものは、カロリン群島の住民や、普通ミクロネシア族と呼ぶ住民の居住する地方の種族と混血の證跡がある。またこの證跡はニューアイルランドのテンチ島、エミラ群島、セビック區の沖合スハウテン群島にも見られ、マヌスに於ては混血の範圍が廣く、タウウ島に於ては狹い。

ミクロネシア族の特徴としては仲直な頭髪及び蒙古人特有の二重瞼を擧げることが出來る。

この種族の特徴を示すものは約三千名足らずである。

なほ、ニューブリテン、ラバウル附近に住むブランチベイの土民に就て見ると、彼等はメラネシア系に屬してゐるが、外來の文化に接觸したためか、他の種族よりも古來の特性を失ひつゝある。皮膚はパプア族よりも稍々色が薄く褐色を帶びてゐる。男の身長は平均五尺内至五尺六寸で、四肢は長く足趾は廣く、指は段々と細長くのびてゐる。針金の如き肢體を有してゐるため連續的の激勞には耐へ得ないが、その健脚には驚くべきものがあり、長途の旅行にも疲勞の色を見せない。

智能は低劣で、稍もすると氣難しい氣性がある。然し德義心は強く賣淫行爲は稀である。男は狩獵、漁撈、庭園の準備等を行ふのみで、女が庭園、農園、製品の販賣等に從事することは蘭領に於て見られるところと同一である。結婚は異族結婚で、子女は母系に屬する。一夫多妻は往時には一般に行はれてゐたが、キリスト教傳來と共に絶滅して了つた。

昔は秘密結社がいくつかあり、會員外から金錢、贈物を强要した。嘗てはその勢力が非常なものであつたため、一九一二年ドイツ政府は土民の勞働に支障を來すことを考へ、一定期間結社の集會を禁止した。然し、今日でも尙相當の勢力を有してゐる。

食人の蠻風は宣教と、政府の絶滅運動が行き渡る以前には一般に行はれてゐた。精靈崇拜が支配的で、井戸、道路、河川、樹木等は皆靈あるものと信じ、雨、雷、電光等は特別の靈が掌るものとしてゐる。彼等の主食物は芋類、バナナ等で、魚、豚、肉等は多少贅澤であり、鳥、犬等の肉は特別の場合に食ふ。

土民以外には歐人が多い。一九三七年度の統計によると四千五百八人で、そのうち英人が最も多く三千四百七十二名を占めてゐる。支那人は千七百三十七名で、小工業者又は商人として營々辛苦、或者は相當の富を得てゐる。日本人は僅か三十八名に過ぎなかつた。

ハ、英領パプア

當領の住民は明確に三分し得る。即ち、パプア族、メラネシア族及びネグリート族である。

パプア族は中部より西方に住むもので、頭髪は縮れ且つ短い。何れの海岸住民よりも皮膚は黑色で、性質は移り氣であるが、東部の住民より沈默、陰鬱であるといふ。然し彼等も蘭領のカヤカヤと異つてゐるといふことは、兩者が全く異つた頭飾りをなし、異つた裝飾をつけてゐることを見れば推定し得るところである。唯、海岸のカヤカヤを粧ふたブルーム河のカヤカヤ

は容易に識別が出來ない。

ストロング博士によると、パプア族は全く混血種ではあるが、その種族構成を明確に判別することは困難であるといふ。然し大體推定されるところでは、ビスマルク群島よりニューギニアの東北岸に渡來し、後東及び南海岸や又處々奥地に侵入して居住するに至つたメラネシア族の混種であつて、濠洲の土民とも關聯を有するものの如くである。例外としてロッセル島がある。この島民は純粋のパプア人であり、國有の言語を失つてゐない。性兇暴で尙惡名を殘してゐる。

海岸のパプア人は概ね海上に梯比せる家屋を作つた。家の下部は海の滿潮時の線に達してゐる。これは過去に於て防禦の必要上からこの樣な家屋を作つたものである。この習慣は衛生上よいため政府の奬勵するところとなつてゐる。彼等は陸地に住む土民に屢々襲はれたが、陸地の土民はカヌーを有しなかつたためこれを防ぐことが出來た。

當領の大部分の處では家族でその家屋をつくる。フライ河地方では土民は長方形の家をつくる習慣があつた。蘭領に於て見られたものと同じく男又は女丈の家がある。また諸々にドブと稱する家があるが、この種類は區々であり、ポートモレスビーの露臺からプラリ河三角洲上の

巨大なる家の如きものまである。ドブは土民團體の集會所であり、公會堂であり、その中には土民の裝身具、豚、鰐の頭蓋及び死亡した友人や敵の頭蓋が一樣に並べたてゝある。

古來パプア族は共產制度であり、歐人の渡來直前でさへ極端な形態をとつてゐた。酋長はあるがその權力は微々たるものであつた。現在では過去に酋長の有してゐた權力よりも政府の部落駐在巡査の方が强い權力をもつてゐる場合が多い。

メラネシア族は多く當領東半部に住み、皮膚色は赤銅色を呈して西方のものよりも一般に淡色であり、往々黃色のものもある。パプア族とこの種族とはポゼッション岬より南北にひいた一線の兩側に住んでをり、中央に於て兩族の衝突を見たといはれる。兩種族の間には雜婚が行はれる。その場合、例へばフライ河々口キワイ島出身の土民がポートモレスビーに於て東部地方の女と結婚したとすると、通常夫婦は東部地方に留る。また支那人等のアジア人は往時當領には多數在留してゐたが、これらの混血によつて顏色が多少黃味を帶びて來たのではないかとも考へられる。

彼等の頭髮は大して縮れてをらず波狀をなしてゐるが、縮毛、直毛等も屢々見られる。所謂箒頭は著しい特徵である。西部の住民に比すれば快活であり、或地方に於ては放縱ですらある

といふ。メラネシア語を採用してゐること及び彼等の性質等は、彼等が東方及び東北方から來たものであると稱せられる所以である。然し、この移動說は單に推察に留るものであつて、基礎となるべき資料はない。原住民卽ちパプア人の移動に關する旣知の事實は極めて少く、或者はパプア人とベンガル灣のアンダマン人との間に關聯ありとすることさへある。

メラネシア族はボゼッション岬とサマライ間の南岸、サマライから北東岸までをその居住地域とする。彼等は食人種ではなかつたが、サマライ地方に於ては隣接せるパプア人の風習をとり入れたものの如くである。

歐人が彼等を發見したとき、彼等は新石器時代に入つたところであり、研ぎすました石斧を用ひて森林や籔を切り開いた。戰爭には石の棒や石の槍を使用した。弓矢は西方まで使用されてゐるが、南海岸のボゼッション岬から北東岸に於ける獨領境界を少し超えた處までの一線より東部は、これを取入れてゐない。

ネグリート族は屢々矮人と稱され、山脈地帶に見うけられる。パプア族と混血をなしたものは到る處に見られる。パプア族とネグリート・パプア混血種族とは言語に於ても大差があり、類似せる形跡もない。ネグリート族がパプアに來たのは數千年の昔のことであり、當時の太平

洋の陸海の狀態は現在とは大分異つてゐたものと思はれる。然し、彼等に關する詳細な事柄、殊に混血の狀態は明かでない。

土民以外の住民は殆ど總て歐人であつて、大體千百名內外である。最近は歐人以外の外國人は入領殆ど不可能であるため、全く存在しないといつても過言でない程である。一九一五年頃には支那人三名、日本人九名、更にマレイ人九名とフィージー、サモア等の土民がゐたといはれる。

三、統　治

ニューギニアは地理的に見て全く一つの島であるにも拘はらず、政治的には前述の如く三つに分けられてゐる。

島の中央を南北に貫く東徑百四十一度の子午線の西半はオランダに屬し、全島の約半ばに當る。それより東は英領である。これは更に分れ、南半ば濠洲聯邦の屬領である。北半は第一次世界大戰までではドイツ領であつたが、同大戰の結果濠洲の委任統治領として今日に至つた。これらは各々その附近の附屬諸島を含むことは云ふまでもない。次にその各領に就て、その歷史

と現在の（といつても大東亞戰爭開始以前の）統治の狀況を概觀することにしよう。

イ、蘭領ニューギニア

何時の時代からオランダがニューギニアと交渉をもつに至つたかは餘り明かでない。最初にオランダ人がこの地を訪れたのは、一六〇六年で、トレスガトレス海峽を發見したといふ風耳のあつたそのあとを追つて、ウイリアム・ヤンツェが海峽方面を探査に向つた。然し、ニューギニア本島には上陸しなかつたものの如くである。その後、コルネリス・デダルが一六一六年に本島の海岸に到着し、次いでル・メール及びスハウテンが到着したといはれてゐるが、上陸したのが何處の邊かは分明でない。

十六世紀にはチドールのスルタンは既にパプア諸島及びニューギニア本島の領有を實現し、各地方の酋長によつて認められてゐた。然しその主要な目的は奴隷の賣買にあつたので、地域的に何處から何處までといふ風に判然とした境界は定つてゐなかつた。その後、一八四八年に至り、オランダはチドールを征服するや略々今日の全蘭領ニューギニアに相當する地域が、チドールに屬してゐるとした結果、これらは總てオランダの版圖に入ることを宣言した。二十世

紀の初頭にはニューギニアは三區に分割せられ、テルナテの理事官管内に編入せられてゐた。その後、幾多の改廢を重ねたが、現在は左の如くに分れてゐる。

- モルッケン理事州（アンボイナ）
  - 北ニューギニア分州（マノクワリ）
    - マノクワリ副分州
    - ソロン副分州
    - ホーランヂア副分州
  - 西ニューギニア分州（ファクファク）
    - ファクファク副分州
    - 中部フォーヘルコップ副分州
    - イナンワタン副分州
    - ミミカ副分州
  - トアル分州（トアル島）
    - ケイ諸島副分州
    - アル諸島副分州
    - タニンベル諸島副分州
    - 南西諸島副分州
    - ボーフェンヂグール副分州
    - 南ニューギニア副分州

右の三つの分州の外にアンボイナ、テルナテの二分州があり、何れもモルッケン理事州に屬してゐる。理事州はこの外に四つあつて合計五理事州が大東知事州を構成する。理事官の駐在するアンボイナには副理事官、內務監督官が居て理事州を統べてゐる。北ニューギニア分州の主都マノクワリにはオランダ人副理事官、內務監督官、會計檢査官が駐在する。西ニューギニア分州の主都ファクファクには副理事官、會計檢査官が駐在する。副分州のそれぞれ重要な處には內務監督官、其他の處には取締官が駐在してゐる。

軍備としては、マノクワリに獨立守備隊がある。これは長以下二名のオランダ人士官及びアンボイナ人士官を以て編成した約八十名の一隊よりなつてゐる。

警察方面は、武裝警察、地方警察及び一般警察に分れるが、一般警察は數に於ても重要なものではなく、武裝警察の方がより重要である。一九三一年に於ける武裝警察官の總數は約三百十五名內外であつた。これは當領の所謂安寧、秩序及び平和を確保することを主眼としてゐる。武裝警官は主としてアンボイナ人、メナド人及びジャバ人よりなつてゐる。一時はパプアンをこれに採用したこともあつたが、その結果は餘り芳しくなかつたので現在は使用してゐない。委任統治領及び英領パプアに於ける武裝警官隊が、その地の土民により組織され而も良好

な成績をあげてゐることゝ比較すれば極めて興味ある事柄である。この武裝警察は現在では野戰警察と稱されてゐる。然し、勿論戰爭を事とするのでない。地方警察は一九二八年まで存在したが、現在では統治警察と稱され、大體武裝警察と同樣な任務をもつてゐる。然し、南部ニューギニアには武裝警察と一般警察しかない。

地方裁判所はセレベスのマカッサルにあつて、大東知事州の5ちの四理事州を管轄してゐる。從つてモルッケン理事州はこの下に立つてゐる。これは特別の場合の外總ての事件を三名の判官を以て判決及び處分するもので、蘭領東印度に於ける他の地方裁判所と同じである。ホーランヂアにはランドヘレヒトがあつて輕微な裁判事項を取扱ふ。判官は副分州長官が兼務してゐる。その外に日本の區裁判所に相當する理事州裁判なるものがマノクワリとファクファクとにあつて、副分州長官がその判官を兼ね行つてゐる。

ロ、委任統治領

ドイツ人が當領と交渉を持つに至つたのは十九世紀に入つてからであるが、正式にその保護領なることを宣言したのは一八八四年十二月で、本島のカイザーウイルヘルムスランド及びそ

の隣接諸島を包含することを明かにし、數年を出でずしてソロモン群島、ナウル島にまで占領の手を擴げた。これらの基礎を開いたのは幾多のドイツ商社であり、就中最も活躍したのはニューギニア會社であつた。

ドイツ、ハンブルグのゴッドフロイ・アンド・ソンズ會社が西太平洋に於ける貿易市場調査のため商船をこの地に派遣したのは一八五七年であつたが、財政的破綻のため幾多の變遷を續け、最後にドイツ南洋植民地設立を目指して組織されるに至つたのがドイツニューギニア會社である。

會社はドイツ皇帝の勅許狀によつて特許會社となり、あらゆる權限を有してゐたが、一八九九年ドイツ政府の手に收められた。政府は總督を任命し、當時當地方にゐたドイツ人約百五十名を動員して、各地の探檢を行ひ、積極的に經營に乘り出さうとした。然し一九一九年第一次世界大戰が終了するや、ドイツはこの地を領有すること僅か三十五年にして英國の手に委ねなければならなくなつたのである。

濠洲が戰後この地の統治を委任せられるや一九二〇年九月、ニューギニア法令を濠洲議會に通過せしめ、濠洲總督は當領統治の大權を附與せらるることゝなつた。

この法令中重要なる事項は從來のドイツ法規の廢止、一九二一年制定のニューギニア法令の採擇である。その後、一九三三年五月當領土の政治組織に自治法を加へた。この修正せられたニューギニア法令は、行政評議會及び立法評議會を置くことを規定してゐる。

行政評議會は濠洲總督の任命する九名の議員よりなり、そのうち八名は當領の官吏で一名は民間より指名によつて選出される。これは當領の最高行政官たる行政長官を補佐する機關である。

更に當領の立法機關である立法評議會は前記の八名の官吏及び七名の民間議員よりなつてゐる。民間議員七名のうち、三名は農園主、二名は鑛業關係、他の二名は商業關係のものである。兩評議會とも行政長官が議長である。行政長官は濠洲聯邦總督によつて任免せられる。從つて當領土に關する全責任は同總督がこれを負ふものである。

一般行政諸局は長官々房の他に、財務局、土民局、衞生局、土木局、稅關船舶局、鑛山局、測量林野局、農務局の八局がある。

當領は七區に分れ、各區には區長が行政事務を取扱つてゐる。行政區は次の通りである。

セビツク　（中心地ウエワク）

マダン　（マダン）
モロベ　（サラモア、ラエ）
マヌス　（ロレンガヌ）
ニューブリテン　（ラバウル）
ニューアイルランド（カヴィエン）
キエタ　（キエタ）

ニューギニア警官隊は英領パプアと同じく武裝してをり、行政長官の統率下にある警察監督官がこれを指揮してゐる。これは三つに分れ、歐人警官隊、歐人補助警官隊及び土民警官隊となつてゐる。土民警官隊は殆ど全部が土着民よりなつてをり、約七百五十名位である。但し、ラバウルは支那人及び多數の土民勞働者がゐるため、その保安取締のために獨立の警察署をおいてゐる。

裁判所には大審院、地方裁判所及び土民裁判所の三つがある。三者とも歐人、アジア人、土着民に關し裁判を行ふが、入獄を宣せられた歐人は濠洲へ移送せられて其處で服役する樣子である。土民裁判所は專ら土着民に關して裁判を行ふものであるが、それは極めて簡單に處理せ

られてゐるといふ。

刑務所は行政長官に屬する典獄が指揮し、十六ケ所の主要なる都市部落にある。

ハ、英領パプア

現在の英領パプアを英國領土の一部分として宣言したのは一七九三年に始まる。即ち、當時の英國東印度會社に屬する軍艦がダーンレイ島に上陸し、ウイリアム・バンプトン及びマチュアルトといふ二名の士官が正式に領有に宣言を行つたのであつた。然し英本國政府はこれを全く不問に附した結果、約一世紀の間ニューギニア領有の問題は省り見られなかつた。ところが一八八二年になつて、ドイツ政府がニューギニアの北岸方面に植民地を建設せんとしてゐるといふ情報が濠洲に傳はつた。その具體的な情報として、或るドイツの會社はそのために正に活潑な行動を開始せんとしてゐるといふことが明かになつたので、濠洲植民地政府は極度に驚愕し、濠洲の北門であるニューギニアが外國勢力に侵されることは濠洲自身の安全に重大な恐怖を與へるものであるとの理由から、英本國政府に對してオランダの未だ領有宣言を行はざる地方を急速に自國版圖に加へるやうにとの建言を行つた。これに對して本國政府は何等の努力を

もなさなかつた。ところが事態は急を告げて來たので、グイーンスランド首相サー・トーマス・マツクイルヴレイスはこれを實行に移さうと決心し、翌年四月四日未だオランダの宣言しないニューギニアに於ける他の部分の領有を正式に宣言した。而も尙、これは本國植民大臣アール・ダービーによつて否認された。こゝで全濠洲は植民地會議を開催し、結束して本國政府にこれを認めることを慫慂した。流石に本國政府もこれを無視することは出來なかつたと見えて、毎年一萬五千磅の行政補助金を濠洲植民地が支出するといふ條件附でこれを承認した。本國政府は艦隊を派遣することになり、同年十二月一日、二百五十名の士官と水兵がポートモレスビーに上陸してニューギニアの保護領なることを宣言し、こゝに正式に英國による領有が成立したのである。然し現在の委任統治領はこれには包含されてゐなかつた。

一八八八年、ウイリアム・マックグレゴル卿が初代の行政長官に任命されたが、卿の獻策によつてこの保護領は同年四月九日直轄植民地となり、六月八日皇領植民地として憲法が制定され、クイーンスランドの知事及び濠洲總督を經て國務大臣に屬する行政官をおき、その補佐機關として行政評議會と立法評議會とを設け、司法、行政を司り、これを英領ニューギニアと稱した。

更に一九〇二年三月十八日の條令によつて濠洲聯邦の一地方とし、一九〇五年十一月六日のパプア法令によつて濠洲聯邦の治下に屬するパプア領と稱することになり現在に至つてゐる。

パプア法令とは當領に副總督をおき、濠洲聯邦政府のために諸般の政務を委託することを規定したもので、副總督の駐在する主都はポートモレスビーである。この副總督の顧問及び補佐機關として行政評議會と立法評議會とが設けられてゐる。

行政評議會の議員は定員六名であつて、當領の官吏たるべきことを定めてある。立法評議會は右の六名に、更に官吏でない民間の者の中から五名を任命することになつてゐる。

立法評議會は當領の平和、秩序、正しき政府のために立法すべき廣範な權限を有してゐる。これを通過した法令は副總督の承認によつて效力を發するが、その承認より六ケ月以内に於ては濠洲總督はこれを取消し得るものとしてゐる。離婚、土地處分、武器彈藥、酒類、阿片等に關する法令は副總督と雖も豫め總督の意向を確めるまでは承認を與へない制度になつてゐる。

一般行政諸局は、財務局、土地及鑛務局、土木局、司法局、土民事務局、衞生局及び官房事務局の七局に分れてゐる。

行政區は八區に分れ、各區には區長をおき、比較的人口の多い區には副區長をおいてゐる。

區長は官房事務局長に直屬する。行政區は次の如くである。

西　區（中心地ダルー）
デルタ區（キコリ）
ガルフ區（ケレマ）
中央區（ポートモレスビー）
東　區（サマライ）
北東區（ツウフイ）
北　區（ココダ）
南東區（ブワガオイア）

各區には區長の下に一警部の指揮する十五乃至二十名の武裝警官隊があつて、土民に對する實際上の統治は、表面上は政府が握つてゐるといふもののその實はこれら武裝警官の手中にある。

中央裁判所はポートモレスビーにあつて、大體蘭領に於ける裁判所と同樣な權限を有してゐる。この裁判所の特色は、裁判官の一名を各地に派してその土地にて裁判をするための會議を

開くことである。各區の區長は豫め審問を行つて一件書類をポートモレスビーに送付するので出發前に事件の大要を知ることが出來る仕組みになつてゐる。區長及び副區長は歐人及び土民に對し、輕微な刑事事件に對する判決を行ふことが出來る。金鑛のある北區及び北東區には裁定官をおき、鑛業者間に起つた係爭を解決する。これは通常區長が兼ねてゐる。

パプア人に對する判決は、首狩り、食人、殺人等には嚴刑を課し、警察に勤務する土民に對してはこれらの場合死刑に處し、其他の邊隅の地にして最近歐人と接觸するやうになつた地方では事情を酌量して重懲刑を科してゐる。

四、ニューギニア發見並に探檢

ニューギニアが最初に歐人によつて發見されたのは一五一一年の昔に溯る。即ち、ポルトガル人航海者フランシスコ・セラムとアントニオ・ダブロウの二名は、ニューギニアの南西海岸を發見し、その航海記にこれに就て記してゐる。それより五年後、ドン・ヨルヂ・デ・メネシスといふ一ポルトガル人水兵がゴアよりテルナテへ向ふ途中嵐のため難破し、北岸の良港と述べられてゐる處に一ケ月間とゞまつてゐた。これはフンボルト灣であらうと推測されてゐるが

彼はそこで船を修理してゐる間に、黒色で縮毛の土民を發見し、これに適する語をマレイ語から撰んでパプア（プアプア……縮毛の意）島と呼んだ。このパプアなる名稱は更に一般的なニューギニアといふ名稱と共に今尙用ひられてゐる。

これら三名のポルトガル人は西方からこの島に來たのであつたが、その後スペイン人は東方からやつて來た。

その最初はアルヴァレス・デ・サヴァエドラで、一般のニューギニア研究書ではこの島發見の榮譽を彼に與へてゐる。彼は一五二七年、メキシコ征服者であるコルテズのメキシコ探檢隊に參加し、翌二八年アメリカへの歸途ニューギニアの北岸に沿うて四百粁を航行し、途中投錨した各地方で金の痕跡を發見した。彼は彼がこの島を發見した最初の文明人であるといふ考へから、右の事實に基いてイスラ・デル・オラ（金の島）と命名した。一五五四年のヴェネチアン海圖にはこの名稱を用ひてゐる。然し、一說にはかく名付けたのは他のスペイン航海者インゴ・デ・レテスであるともいふ。彼は一五四五年、西アフリカ、ギネア沿岸の住民とこの島の住民との間に頭髮及び外貌の相似せることを認めて、ヌエバ・ギネア（新ギネア）と命名した。レテスはサン・ジュアン號に搭じてテルナテからメキシコへの歸途、北海岸に上陸してスペイン

國旗を打たてたのであつた。

以上の發見は何れもニューギニア北海岸であつたが、南海岸の發見は十七世紀に入つてから行はれたのであつた。

ルイス・ヴァス・デ・トレスは一六〇六年二隻の帆船を指揮してペルーより太平洋を西にむけて横斷し、同年六月濠洲とニューギニアとの間を通過したが、その海峽なることを知らずしてニューギニア南岸を調査し、正式にスペイン國王のために國家の有となした。

それと時を同じくしてウィリアム・ヤンツはダイフキン號にて西岸及び南兩岸を訪れ、のち濠洲のカーペンタリア灣に入つてヨーク半島の西岸を南下した。彼はこの灣をもニューギニアの一部であると考へたが、恐くはこれが濠洲發見の最初ではなかつたかといはれる。

一六一六年、コルネリウス・デダルは西海岸の一部に、ウイレム・スハウテンとジャック・ル・メールは彼の名を冠したスハウテン群島を發見し、更にニューアイルランドをも發見したのであつた。

一六二三年には南西海岸を航行中であつたヤン・カルステンツが、快晴にめぐまれた一日、頂上に白雪を頂く高峯を發見したが、これが現在のカルステンツ峯である。

その後、多くのオランダ人航海者が引續いてこの地を訪れたが、それらのうち最も有名であるのはタスマン海峽を發見したアベル・ヤンツ・タスマンである。彼はまたニューアイルランド海面にも到つたといはれる。

イギリスはポルトガル、スペイン、オランダ等よりは多少遲れ、一七〇〇年ウィリアム・ダンピールがニューブリテンと本島との間を航海し、奥地の山々を望見したのに始まる。現在なほマダン北方の小島に彼の名をとゞめてゐる。フィリップ・カーテレットは一七六七年ニューアイルランドの島なることを確認した。

その他、多くの航海者がこの地に航海を試み、略々その輪廓を明かにしたが、トレス海峽が濠大陸とニューギニアとを分つことは久しく疑問とされ、約二世紀近くも兩者が陸續きであると考へられてゐた。

十九世紀に入ると、發見航海の時代は過ぎて探檢調査の時代に入ることになつたが、各國の領土獲得競爭は熾烈となり、濠洲、オランダ、ドイツ等が各々その勢力の延長を圖つたことは前述の如くである。

一八二四年三月十七日には英蘭兩國間に國境確定の協議がとり行はれ、その決定を見、更に

一八九五年に至つてその更改を見た。英獨間の境界は一八八五年に定められた。

この世紀には學術探檢隊も行はれ、各地に植民地を建設せんとする傾向も盛であつた。オランダは一八二八年にドウブス要塞を構築した。マックルーエルの同名の灣に於ける植民地建設の試みがあり、更に數多の植民地が建設されたが、殆ど總て疾病のために放棄せねばならなかつた。これらは探檢、調査の不充分なところに由來するものである。

ニューギニアの探檢の歴史は大別して次の如くすることが出來る。

一九〇六年以前（沿岸調査時代）

一九〇七——一九一四年（探檢黄金時代）

一九一五——一九年（世界大戦中停頓時代）

一九二〇——三四年（新探檢時代）

一九三五年（企業探檢時代、航空機使用時代）

なほ、十九世紀の末葉から二十世紀にかけては大規模な探檢も試みられたが、著しい進歩をとげたのは航空機を使用するやうになつてからであり、最近に於てはニューギニア探檢に航空機は必要缺くべからざるものとなつてゐる。

蘭領、舊獨領、英領といはず全ニューギニアを通じて多くの探檢隊がこの地に向ひ、その記錄の刊行せられしもの、また少しとしない。然し、近時各政府の官吏にして領內巡羅行をなす人々、及び各敎會の宣敎師等の業績はこれを詳かにすることを得ない狀態にあるが、世界全人類のため惜みてもなほ餘りある事柄でなくて何であらう。

蘭印政府は、一八七一—二、七五—六年の二回に亙り、ファン・デル・クラブ其他の者に命じて蘭領ニューギニアの探檢を行はしめたのを始めとし、陸海軍支隊の大規模な探檢隊を奧地に入りこませてゐるが、その二三を擧げるならば、一九〇七—一五年に亙る蘭領ニューギニア陸海軍共同探檢隊、一九二一—二年に於けるウイルヘルミナ峯探檢等がある。オランダ地理學協會の主催した一九〇四—五年に於ける南ニューギニア探檢も有名で、其他當領に於てなされた探檢はその成果を刊行物として多數世に送つてゐる。

現在の濠洲委任統治領であつた時代、ドイツ人は屢々この地の探檢に從事し、學術的な報告書も數多く出てゐるが、一九〇八—一〇年に於けるカイゼリン・オーグスタ河（セピック河）流域の民俗學的調査等は有名である。

英領パプアに於ては一八八五年始めて濠洲政府による探檢隊が組織せられた。其他著名なる

探檢としては一九二九年チャンピオンによるフライ河からセピック河に至る地域の探檢、一九三五年のハイヅ探檢、一九三八—九年のティラー・リーヒーによる探檢等が有名である。

蘭領に於けるコレインのカルステンツ峯探檢、ペイルメルのミミカ探檢等も亦知られてゐるが、最近最も著名なものとしては、アメリカのニューヨーク自然科學博物館が主催した前後三回に亙るアーチボルド探檢隊がある。

第一次アーチボルド・ニューギニア探極隊は、一九三三年一月ニューヨークを出發、二月英領パプアの主都ポートモレスビーに到着し、南東ニューギニアの鳥類、哺乳動物及び植物の調査を目的として、先づ高山地帶の標本採集を志し、ホワールトン山脈の頂上に至る準備を整へた。一行は數噸の食糧と荷物とを土民苦力に背負はせて奧地の旅に上つた。探檢隊は前後十一回の旅にてアルバート・エドワード山の頂上に達した。當初の目的を達してニューヨークに歸着したのは翌年五月であつたが、航空機を利用しないニューギニアの探檢が如何に緩漫、煩雜であるかを身を以て體驗したため、早速第二次探檢の準備を行ふ傍ら、航空機の物色を始め、ライト・サイクロン發動機一基を裝備したフェアチャイルド水陸兩用機を選定した。

さて、第二次探檢の目的地として選ばれたのは英領パプア南部、フライ河源流の森林地帶及

び更に奥地の山岳地帶であつた。目標は前回同樣動植物の探檢、調査にあつたが、その第二次探檢がこれまでの探檢と異るところは、飛行機、落下傘、無電、其他二十世紀の生んだ科學の粹を餘すところなく利用した點にある。

一九三六年一月、探檢隊の隊長であるリチヤード・アーチボルド・副隊長である哺乳動物學者A・L・ランド博士以下の首腦部が西區の政廳所在地ダルーに集合し、こゝを探檢隊の海岸根據地として準備を進め、三月二十三日第一回偵察飛行を決行し、爾後六回に亙る飛行を行つた。一方汽艇はフライ河を溯航して、その源流ブラック川がパルマー川に合する地點及び若干の地點にキャンプを設けて各種の標本採集の大成功を收めた。

收穫として擧げられることは、ニューギニアの地圖を開いたとき誰しも眼につくであらう本島中央部の空白なる部分、即ちヴィクター・エマニエル山脈、ミュレル山脈等の高山脈地帶に於ける諸高峯を偵察飛行中機上より明かにしたことであり、支流ストリックランド川と本流との間の湖水の形狀をも明かにするを得たことである。この一事を見てもニューギニア探檢には飛行機が重大なる役割を果すことが知られよう。更に食糧等も機上より落下傘によつて投下され、また踏み入るべき奥地を先づ翔破して大體の豫定をたて得ること等も擧げられる。その苦

心談は「ニューギニア探檢」なる書に記載されてゐるが、第二次探檢は豫想外の成功を收めて一九三七年一月一先づ終止符をうつた。

引續いて一九三八年四月より翌三九年五月まで繼續された第三次ニューギニア探檢は、蘭領ニューギニアを北に流れるマンベラモ河の支流イデンブルグ川奥地の中央高山脈地帶を目的として選んだ。この探檢には前回のランド博士外二名のアメリカ側學者が加はつた。更にオランダ側からも二名の學者が參加し、其他蘭印陸軍將校以下多數の護衛隊が隨行した。

今回は双發のコンソリディテッド飛行艇を使用し、基地にはホーランヂアを選び、飛行艇の發着所、無線電信所、倉庫等を設けた。最初の偵察飛行は六月二十一日に行はれたが、密雲のため好結果を得なかつた。第二回の偵察飛行に於ては驚くべき發見があつた。即ち、ウイルヘルミナ峯の北方にある小湖ハベマ湖と、イデンブルグ川との間に幅十六粁、長さ六十五粁にも及び一大裂谷を發見したことであり、その後實地踏査により確められたところによれば、この大裂谷は未だ嘗て文明人の訪れたことのないことが看取されたにも拘はらず、多數の耕地と草葺きの丸屋根の家屋が集合した村落の數より見て少く共約六萬の住民があることを知つたのであつた。

この大裂谷を縦斷するバリム川が南に流れることを確認し、またハベマ湖の北方に小湖を發見した。この小湖は蘭印政府によりアーチボルド湖と命名せられた。

探檢隊はハベマ湖を奥地に於ける基地として、こゝに人員百五名と貨物六萬封度とを空輸し標本採集に、豐地の横斷踏査に活躍を續けた。探檢隊はこの大裂谷に住む土民と種々の交渉を持つに至つたが、彼等は著しく好奇心の强いといふ點を除いては別に敵對行爲を見せるでもなく、溫和な住民であつた。彼等は主として甘藷等の芋類を栽培し、水蝕防止や排水法を心得てをり、美しく築きあげた石垣でとり圍み、丹念に雜草をとり除いた畑をもつてゐる。外界と全く隔絶したこのニューギニアの奥地に相當の文化が開けてゐるといふことは全く世人の想像を絶することであらう。

探檢隊は一九三九年五月九日の引上げまでに第一次、第二次探檢に劣らぬ收獲をあげたのであつた。

斯の如く、最近のニューギニア探檢は殆ど飛行機を利用し、顯著な成果を收めてゐるが、唯に探檢のみならず、産業上各種の調査、更に土民統治の上にも大きな進歩改革を齎すことは明かである。

尙最近、蘭印新聞紙の報ずるところによると、南方チグール河より東は英蘭境界附近に至る約二三萬ヘクターのメラウケ後背地方の地圖を作成し、土壤を調査する目的を以て一九四一年六月、ニューギニア土壤探檢隊がバイテンゾルグを出發したといふ。またオランダ石油株式會社のベルンハルト山探檢隊がエークハウトを隊長として、一九四一年十一月ホーランヂアよりアーチボルド探檢隊と略々同樣のコースをとつて、壯途に上つたと傳へてゐることを附記しておかう。

五、産　業

(一) 邦人事業

ニューギニア全島に於ける在留邦人數に就ては明かでない、蘭領ニューギニアの北岸は僅か三十四名にすぎず、何れも南洋興發會社の事業地に於ける從業員及びその家族のみである。

委任統治領に於ては、日本から直行したものはなく、一旦濠洲へ渡り、それから更に移つたもので、邦人の進出は明治十六年以後の事であり、明治二十八年には二名の邦人が在住してゐたといふ。その後、次第に增加し、世界大戰勃發の頃には百名を超えてゐたが、大戰終了の結

果、ドイツ領が濠洲委任統治領となるに及び新入國者を歡迎せず、原則として入國を禁止したため漸次歸國、死亡等によつて減少し、昭和十五年には三十五名となつてしまつた。英領パプアに於ける邦人數は明かでない。

蘭領ニューギニアに於ける邦人の移住は明治の末期から大正の初期にかけて行はれ、その先驅をなしたのは仙臺の人、細谷十太郎、和歌山縣人、海老名庄次郎、及び大崎權七の三名である。細谷氏は現在南洋興發會社の事業地のあるモミに椰子園を開いた。在住實に三十有餘年に及び、マノクワリ、モミに於ては相當の勢力を得、土民の尊敬をも受けてゐたが、資金を求めて歸朝中、再び渡航の雄圖を果さずして病死した。海老名、大崎兩氏は南洋興發社員として棉作に從事してゐる。これら三名は蘭領ニューギニアに於ける邦人の先驅者として永久にその名を記憶さるべきであらう。然し開拓の先鞭をつけたとはいへ、裸一貫で十分な資本も投じ得なかつたし、また後繼者もなかつたため期待程の成果をあげることの出來なかつたのはやむを得ぬところであらう。

その外にはアルー群島を中心として百十數名の邦人が稍々集團的に活動してゐた。眞珠採取業及び椰子園、製材、造船所、其他雜貨商、大工等を營んでゐたが、ニューギニア本島に於け

る邦人企業としては現在南洋興發會社以外にはなく、しかもこれが大資本を投じて近代的な農企業を營み、樹脂にせよ、棉花にせよ、また黃麻にせよ成功といはれる程の成績をあげてオランダ人を瞠若せしめたことは甚だ意を强くするものがある。然し、南洋興發會社の事業は昭和六年末に始まり今日までやうやく十年の歲月を閱したにすぎない。眞の活躍は正にこれからである。

一九二〇年以來ドイツのフェニックス商事開墾會社が當領でダマル樹脂採取、小規模の造船、貿易其他事業の經營を行つてゐたが、本國財界恐慌の餘波をうけて事業繼續不能に陷つたため南洋興發會社はその權利を買收してそれを繼續することになつた。その後、フェニックス會社より買收した地域と交換的にモミ、及びサルミに新開墾地を得、現在に及んでゐる。

その事業の概略を述べると、マノクワリには事務所があり、モミには二千ヘクターの開墾地にて棉花と黃麻の栽培及び裏作を行つてゐる。このうち八百ヘクターは昭和十四年までに植付を完了した。ナビレにてはフェニックスの事業を繼續して、面積三萬一千五百ヘクターの地にてダマル樹脂を採取する。其他にダマルの集散、玉蜀黍、青小豆、カ、オ、カポックの試作を行ふほか、小牧場を經營して牛を飼養してゐる。サルミに於てはモミの二千ヘクターと共に三千

五百ヘクターに棉花及び黄麻の栽培を行つてをり、現在の開墾面積は百ヘクターである。

その外自社船、ヌシ丸（總噸數二四一噸、最大速力八—十哩）、大東丸（速力六—七哩）及びヘールフィンク號（噸數九噸、最大速力八—九哩）を以て我が南洋群島、パラオ—マノクワリ間、マノクワリと各事業地間の連絡を行つてゐる。

棉花栽培が當領にて試みられたのは一九〇五年に溯ることが出來るといふ。その試驗の結果はアメリカ棉に近いかなり良質のものであつた。其外にも小規模栽培が行はれたが、發展することなく放棄されて終つた。オランダ人が棉花栽培をあきらめたのは、前述の如くニューギニアは降雨量多く濕度も高く、從つて棉花栽培を不可能にすると考へたからであつた。然しオランダ人の議論は彼等自身の無能を辯護し、邦人の成功を疾視し、我が失敗を望んでゐることを自然條件を借りて表明してゐると見られぬこともない、南洋興發會社がこれに反して棉花栽培に成功することを得たのは、その不撓不屈の科學的研究によることは勿論であるが、畢竟我が國民の熱帶に於ける馴化性の高いこと、歐人にして不可能なることも日本人なれば決して不可能ではないことを實證して餘りあるものであらう。

因に、棉花の收穫は次の如くである。

年度	植付面積	町當收穫高
昭和十一年	八〇ヘクター	一、四二四斤
同　十二年	四〇〇　同	一、〇三六斤
同　十三年	六〇〇　同	一、四七四斤
同　十四年	六三五　同	一、八〇〇斤

右の如く昭和十三年度一ヘクター當千四百七十四斤の收穫は世界主要棉作地に於ける平均數量實績に徴しても遜色のない好成績である。この好成績に驚いたオランダ當局は棉花の輸出を禁止したため、昭和十五年度に於ては五百三十ヘクターに黄麻を栽培したが、これ又見事な成績を示してゐる。なほ昭和十四年度に於けるコパール樹脂の産高は二千六百八十六ピクル、十萬七千四百四十圓に上つた。

濠洲委任統治領に就ては既に一言した如く、現在の邦人在留數は極めて僅少である。最初に渡航した邦人は長崎縣島原の人、小嶺磯吉で、氏は明治三十三年濠洲の木曜島から帆船で渡航し、當領に於て造船業を創造し、椰子園經營を行ひ、營業成績を大いに擧げ日本より船大工及び漁夫等を招聘し、當時は邦人數二百名に及び娘子軍まで進出するなど殷賑を極めた。ニューギニアに於ける邦人先驅者の一人として種々の功績を殘した氏の一生は波瀾萬丈で、所有農園

アドミラルチー諸島に於て蠻人に襲撃されたことは數度に及んだ。特筆すべきは世界大戰勃發當時、ドイツのため敢然立つて義勇軍を組織し、平常の恩義に酬いんとしたが、雄志に參畫せんとしたものは僅か數名であつたため、この擧も挫折して後日の逸話となつてゐる。

その後、日本が對獨宣戰を行つたために英濠軍のために力を盡し、ドイツ警備艦コメット號を捕獲して偉勳をたてたりした。一方椰子園の擴張計畫をたて、更に隣接せる五百町歩の租借權を得て大正十年までには約一千町歩の植付を了してゐた。造船、水産事業もこれと平行して發展したが、昭和八、九年頃の不況の波に抗し切れず、打ち續く缺損に事業整理の途中、昭和九年十月三日、六十九歳を一期として異郷ラバウルの土と化した。遺骨の一部はラバウル在住邦人の懇望により昭和十年七月十五日、南洋貿易會社汽船平榮丸によつてラバウル市に屆けられ、同市公園内邦人墓地に葬られた。氏の偉業を偲ぶに相應しい墓標は今なほ熱帶の陽の下に燦として輝いてゐる。

氏の死後、その農園を讓りうけたのは熊本縣の人、長濱太市である。同氏所有の農園は三ケ所、二百五十一ヘクターで、すべてニューアイルランドにあるが、同島の三百ヘクター及びアドミラルチー群島の千二百七十六ヘクターも共同經營者の死亡により今日同氏の手中に歸して

ゐる。

その他に德島縣人、遠藤繁太郎は初めラバウルで造船業を營んでゐたが、後、アンビトル島に移つてココ椰子園を經營し、傍ら島民のためにボートを作つてゐる。

眞珠採取業としては眞野喜三郎外五名が、ラバウル、タラシア、ブゲインビル島を根據地として活躍してゐる。

(二) 農業、牧畜

ニューギニアの農業は他の東南アジア各地域のそれよりも遙かに遲れてゐる。屢々繰返す如く、未だ調査も行きとゞかない廣大無邊の未開耕地が全土を蔽ひ、その將來性を云々するにしてもこれを正確に云ひきることは極めて困難である。從つて現在、我々の近づき得る海岸・諸島嶼に於て小規模に行はれてゐるところを見て行くことにする。

ニューギニアに於ては、農業と稱することを得ない程度の、土民の自己消費に充てる食物栽培と、海岸其他比較的外界と接觸を保ち得る地方に於て行はれる栽植農業とに分つことが出來る。

前者は我々が想像することの出來る最も原始的なものと比較して幾らも進歩したものでないことが判る。後者は東印度に於ける所謂エステート農業に當るが、一般に程度は低い。僅かに二三の個所に於てのみ比較的高度のものを見出し得るのみである。

土民が自己の消費に充てるものとして栽培するのは、ヤム芋、タロ芋等の芋類、豆類、玉蜀黍、落花生、甘蔗、バナナ、サゴ椰子、ココ椰子及び煙草である。

また栽植農業の大宗はココ椰子であり、それに亞いで棉花、カポック、コパル、ダマル、ゴム、珈琲、カカオ等である。

イ、蘭領ニューギニア

先づ土民に就て見ると、これはニューギニア全般に於けるものと略々同樣であつて、彼等は狩獵を業とし、他方野生又は栽培せる芋類、サゴを常食とするのである。

栽植農業として當領で著しいのは棉花である。これは前述の如く我が南洋興發會社が殆ど獨占してゐる狀態である。

棉花は南洋興發會社がモミ及びサルミに於て栽培に從事してゐる外、センタニ湖畔のイフア

ル於て若干栽培される。そこでは非常に乾燥した年であつた一九三四年には五ヘクターから若干の收穫を得たのであつたが、三五年には最早成功と稱することは出來なかつた。パプア人はこの棉作を眞似てセンタニ湖畔周邊にこれを植えてゐるが、格別のことはない。一九〇五年、ファクファクでオランダ人が棉花の栽培を試みたが、その見本は概して良好であり、特に色は美事であつた。纖維の長さは普通の米棉と匹敵したが、その質は印度棉と近似してゐた。これらの實例はニーギニアに於ける棉花の栽培が必しも不可能でないことを立證するものであらう。

ココ椰子は北岸に多く見られ、土民にとつてこれの栽培は重要なものである。何故ならばそれは自己の食糧にも供せられ得るし、コプラを目的とする買占人に交換手段として重要であるからである。なほ土民の交換手段となるものにカポックがある。

現在コプラとして輸出されるものは、ソロン、マノクワリ、クワデ島、ヤムナ島等のものである。西ニューギニアからは約五百噸、南ニューギニアからは約千五百噸の移出があり、王國汽船會社（K・P・M・）によつて年々運送されるコプラは千五百噸に上つてゐる。優秀な椰子園はスハウテン諸島のスルイとビアックの北岸とであり、ワクデ島、ヘールフィンク灣西岸寄りの小島も優秀である。北ニューギニアの最大のコプラ生產者は、ワクデ島のアハル氏である。

こゝでは他の東印度のものと比較しても劣らないサンドライドコプラが作られる。約四萬五千本のココ椰子樹を有し、一週に一萬顆がコプラになる。四千八百顆から一噸のコプラが作られる故、一週に約二噸餘の生産があるわけである。その外にヌームフォール島には二萬二千本、ワンダメン灣附近には五百本のココ椰子樹がある。ココ椰子には害蟲が發生するが、この地方では害蟲驅除は餘り行はれない。相當高度の生産を行ふこの地方では勞働問題の方が重大な事柄である。パプア人を勞働者に使用した場合、彼等を長く一ケ所に留めてをくことは困難であり、彼等の氣儘を防止するために契約を結んで强制的に勞働に從事させる。ワクデ島はその成績概して良好で、普通一年以上二三年、稀には五年にも及ぶ者がゐる。

サゴ椰子はココ椰子と共に主要産物の一つであり、土民はこれよりサゴ澱粉をとつて自己の食用に供する。その主産地は西岸のソロン、及び北岸のワンダメン灣地方である。パプア人はサゴ園に垣を繞らす。普通の小農園であれば決して永續きせず二三年もすればもとの雜草地又は原始林に反つてしまふが、サゴ椰子園は世代から世代へと引續いて使用される。サゴ椰子は植樹してから十五—二十年後に始めて收穫をあげ得ることを考へれば頷ける事柄である。一本のサゴ椰子は約百瓩の濕れた澱粉を生ずる。土民はサゴ椰子一本で優に六ケ月の生命を繋ぐこと

が出來るのである。從つてサゴは海岸地方に於ては土民との交換物に使用される。こゝに面白いことは彼等がサゴ蟲を食ふことである。パプア人はサゴ椰子を切り倒してそれを二三ケ月間濕地に放つてをく。すると、その髓の中にサゴ蟲の幼蟲が湧き、終にはその幹全部を埋めるやうになる。パプア人は幹に耳をあて幼蟲の動きまわつてゐる音を聞くと、木皮を兩手で破つて無數の眞白な幼蟲をとり出し、搔き集め、恰好の食物として我家に持ち歸るといふのである。

陸稻はフォーヘルコップのアンペルバーケン地方に於て土民が自己の食用として作つてゐる。この地方に於ては百年以上も前から栽培せられ、一九〇〇年頃には生産商は著しく、ミソール、サラワチ、ワイゲオ等に移出されたこともあつた。然し、運輸機關の不備と、移出地の購買力の減退によつて栽培も制限されざるを得なかつた。然し、これは交通機關の發達に伴つて恢復するであらう。蓋しこのアンペルバーケン地方は火山帶に屬し、土地肥沃にして、蘭領ニューギニアに於ては農業に最も適した地方となつてゐるからである。但し、煙草の栽培が試みられたことがあつたが、土性の不適のため失敗に歸した。

土民にとつて稻穗を精製するためには想像以上の勞力を要する。彼等は必要な器具を所有することもなく、原始的な農業段階にある彼等には手數の掛る勞働は適してゐない。從つて、水

田耕作を彼等に期待することが出來ないといふことは、我々の大いに注目すべきところであらう。

水田耕作に適する地方としては、中央高山脈と北部分水山脈との間の所謂湖沼平野、即ちマンベラモ河の流域であらう。湖沼平野は長さ三百粁、幅五六十粁で、マンベラモ河の上流の方は肥沃である。この地方は北より南に進むにつれて肥沃度を增す。スワルト谷が人口稠密であることは既に述べた如くである。またマノクワリ南方のアンダイに於てはキリスト教宣教師がパプア人に陸稻の栽培を傳へ、マノクワリ近邊でも古くから栽培されてゐる。

玉蜀黍は芋類についでパプア土民の常食物となつてゐる。彼等は熟した實を火に焙つて食ふ。その處理法が簡單であるから稻等よりは遙かに分布してゐる。

其他の農產物としては、落花生、珈琲、パパイア、パイナップル、バナナ等があるが、多く土民によつて栽培される。邦人が黃麻栽培に成功を收めたことは既に述べた。アンギ湖地方では馬鈴薯が土民の食用として作られ、豆類、パパイヤ、玉蜀黍もある。

フォーヘルコップを西に流れるサムソン河の長い平野は微細な砂質ロームよりなり、パプア人の畑が處々に分布してゐる。この平野には多くのサゴ椰子が生育してをり、また玉蜀黍、藤、

陸稻、カボツクも見出される。

パポでは規那が得られる。センタニ湖周邊の小平野では、ココ椰子も植えられてゐるが、小面積である。この地方には雜草地があつて、パプア人はこれを燒拂ひ、色々な作物を栽培する。キヤッサバが重要であり、玉蜀黍、落花生、珈琲、煙草も植えられてゐる。

蘭領で將來農企業に有望な地方は、フォーヘルコップでは前記のアンベルバーケン地方、サムソン河流域、東方ではセンタニ湖周邊の地方であらう。

當領に於ける牧畜業として擧ぐべきものは、北海岸に於てはマノクワリ郊外オシに於ける官營牧場、アンダイに近いドイツ移民の牧場、及びナビレに於ける南洋興發會社の小牧場の三者にすぎない。前二者は乳牛數十頭、後者は耕牛三十餘頭を飼育してゐる。南海岸方面には全く見當らない。

ロ、委任統治領

當領で產出するものゝうち、ココ椰子、珈琲、カカオ、カポック等は獨立の企業價値を有し、キヤッサバ、油椰子、サイザル麻、棉花、甘藷、稻、煙草、落花生等は各地に栽培されて相當

の成績をあげてゐる。海岸地方では規那の栽培が適してゐるといはれる。

英領パプアをも含めた英領ニューギニアは蘭領よりはよく開發されてゐる。蘭領は東印度の中心地ジャバから遠距離にあり、オランダの開發政策に於ては著しく下位に立つため殆ど開發されてゐないが、英領の方は政府當局自から力を入れて開發に努力してゐる。

當領がドイツの治下にあつた時代、ニューギニア會社其他ドイツ人は主としてココ椰子栽培に努力して、當領開發の端緒を開いたのであつた。

現濠洲委任統治領政府の農業政策としては、ココ椰子栽培の奬勵、卽ちコプラ生産に力を注ぎ、それ以外のものでも各種の支援を行つてゐる。一例を擧げれば、ラバウル近くのクラバットには特別な農業學校があり、百十五ヘクターの農園を有して種々の試驗を行つてゐる。カカオ、珈琲、ココ椰子、油椰子、ゴム、玉蜀黍、稻、落花生、各種の芋類、ヴァニラ、キャッサバ、サイザル麻、煙草、パイナップル、豆類等々、あらゆる熱帶果樹を試作し、その成績の如何により、ニューギニアに適する品種を發見せんとしてゐるのである。

またキリスト教布教團は各々學校を經營して土民に農業の初歩を敎へると共に、附屬農園に於て彼等の實地の訓練に當つてゐる。

政府は農事試驗場をモロベ區に數ケ所設置して、同區に集中する鑛山苦力の食糧問題の解決をはかり、その農業の將來性を檢討せんと努力してゐる。

ココ椰子は當領の殆ど全土に生育する。當領中ココ椰子栽培面積の最も多いのはニューブリテンで、ニューアイルランド、マダン、キェタがこれにつぐ。一九三七—八年度に於ける各區の栽培面積及びコプラの産高は次表の如くである。

區名	栽培面積（ヘクター）	收穫面積（ヘクター）	コプラ産額（噸）
ニューブリテン	三〇、〇七一	二三、二〇五	二一、六七二
ニューアイルランド	二九、三〇六	二三、一七二	二二、八九五
マダン	一三、〇四七	一一、〇〇二	一〇、四四六
キェタ	一〇、八二七	九、六三一	九、四七八
マヌス	九、七一九	九、一二八	七、七〇三
セビック	二、六九六	二、二七一	二、一〇一
モロベ	一、四四七	一、一九八	九一〇
計	九七、一一三	七九、六〇七	七五、二〇五

當領の椰子園面積は一八八五年には僅かに五十九ヘクターにすぎなかつたが、その後一路增

加の途を辿り、一八九五年には八百七十ヘクター、一九一四年には三萬四千三百七十四ヘクターになつた。世界大戰の結果、濠洲委任統治領となるや、政府當局の政策の結果頓に增加し、一九二四年には七萬一千四百九ヘクター、一九三〇年には八萬二千五百八十八ヘクター、一九三五年には九萬二千七百六十七ヘクターとなつてゐる。

ココ椰子に最も適してゐる地質は濕氣の多いローム質土壤で、多くの海岸地方、河口の陸洲や河の流域に存在する。ニューブリテンの沿岸にはこの栽培に適する地方が多く、將來に於ける更なる發展が期待される。

カカオは委任統治領に於てはココ椰子についで重要である。既に十九世紀の半ばには本島に於て植えられたことがあり、一八八三年及び一八九九年にはセイロン島から新種が紹介された。現在カカオの栽培されてゐる農園は殆どすべて火山帶の諸島、卽ちニューブリテンのタラシア、ベイニング、ヴィトウにあり、またマダン區沖合のカルカル島にも栽培される。ニューアイルランドがこれについでゐる。ニューブリテンに於ける栽培面積は八百八十四ヘクターで當領に於ける栽培面積の八四％を占め、產高は六十一噸で、四八％、ニューアイルランドは三十一噸で二五％を占める。當領の實績によれば、六年間に一エーカーにつき五百乃至七百封度

の產出がある。當領のカカオはアフリカのゴールドコーストのものよりは良質であるが、西インドのものよりは劣つてゐる。

珈琲は政府による積極的な奬勵策の結果、次第に栽培面積、產出高ともに增加してゐる。一九二六年度には栽培面積僅かに六ヘクター、八百八十四封度にすぎなかつたものが、一九三一年度には百二ヘクターに植付けが行はれ、一千百二十封度を產出し、一九三六年度には植付面積五百七十七ヘクター、收穫面積二百二十ヘクターとなり、產出高も四十六・五噸に上昇した。

一九二六—七年には僅かにモロベ區に於て栽培せられてゐたにすぎなかつたが、その後、マダン、ニューブリテン、ニューアイルランド、キエタの各區に擴がり、現在セピック區にも栽培されてゐる。

栽培される種類はロブスター、アラビカ、アラビアン、リベリカ等で、ロブスター種は平地から標高五百—六百の深層地味肥沃の地が適し、ラバウル附近のトマでは良好な成績を擧げたといはれる。アラビカ種は一千—千五百米の高地が適する。然し、ニューギニアには未だ道路の敷設が充分でないために、これが栽培の發展は、先づ道路敷設の問題に係つてゐる。

カポックは種々實驗の結果、ニューギニアの氣候に適することが證明され、政府はこれが栽

培を奬勵してゐる。一九二六年、ジャバのカポック苗を輸入して民間に頒布したところ、或者は成功を見せたので爾後栽培せられるやうになり、現在の栽培面積は二百七十四ヘクターで、その約半分から收穫してゐるが、産出高は云ふに足りない。カポックの栽培はすべてニューブリテン、ニューアイルランドに集中してゐる。

煙草はアンボイナ及びフィリッピンから齎されたもので、農企業としては微々たるものである。然し、パプア人はこれを自己の嗜好品に充てるため、各地にて作つてゐるのが見受けられる。若干の地方には煙草を知らぬパプア人もゐるにはゐる。これから見ると彼等の間の接觸は餘り行はれないやうである。品質の良好な煙草はラム河及びセピック河流域の土民部落に求めることが出來る

油椰子の栽培は極めて有望であり、當領はココ椰子よりも寧ろ油椰子の栽培に適する地が多いといはれる位である。

ゴムは主としてマダン區に栽培され、その面積は五百八ヘクターで一萬二千六百十三封度を産出する。當領の全栽培面積は一千八十八ヘクターである。其他の區からの産出はない。

その外にサイザル麻、落花生、玉蜀黍等がある。タピオカは土民の食糧となる。甘藷はビス

マルク群島に適地が多い。デリス根は古くから若干の土民間には作られてゐたが、昨今は海岸地方で土民が彼等の必要とする斧やナイフと交換するために作つてゐるに過ぎない。陸稻はホリーゴースト教會がセピック河畔にて七百ヘクターの面積に栽培を行つてゐる。ニューブリテンのケラバット農事試驗場では良好な成績を收めた。

當領の開發は蘭領ニューギニアに比すれば著しく進んでゐる。一九三七年度に於ける開墾面積は二十萬七百六十八ヘクターであつて、實際に栽培されてゐるのは十萬一千二百六十五ヘクターである。

栽培者の數は四百六十四である。

開發が進んでゐるとはいへ、當領の面積二十四萬九百三十一平方粁から見れば誠に寥々たるものである。

當領には牧場に適する土地は多いが、現在の利用價値は僅少である。一九三七年度に於ける家畜の數は、馬一千百二十三、牛一萬九千二百七、羊一千一百七十八、山羊八千二百五十四、豚六千六百七十九、家禽類一千一百四十九頭で、全體として見ればニューアイルランドが首位を占め、こゝには山羊及び牛が多い。次でニューブリテンで牛、豚が多く、第三位はマダン區

で殆ど牛ばかりである。以下キエタ、セビック、マヌス、モロベ區の順序となるが、モロベ區は山中の鑛山まで運送するのに飛行機を利用せねばならぬ狀態にある。

ハ、英領パプア

當領の土民は若干の小農園を所有してをり、それに食用作物を栽培することによつて日々の需要を滿してゐる。彼等の常食とするのは前述したところのものと同一であるが、多少詳しく云ふならば、ヤム芋、タロ芋、甘藷等の芋類と、豆類、ココ椰子、サゴ椰子、甘蔗、バナナ等である。

フライ河の貫流するフライデルタにはキワイパプア族が住んでゐる。彼等の主食物は前述の芋類である。九月の終りごろ雉鳩が巣につき、叢林中の或る木が花をつけたときに、彼等は芋を植える季節が來たことを知るのである。また六月にも植えることがある。小さな芽は密植され、約三週間後に親床に移植されることを見れば、苗床の觀念は彼等にも亦存するのである。彼等の植付け其他には必ず儀式を伴ふ。然し、總ての作物に就て云へることであるが、その栽培面積がいくらで收穫高がいくらであるかといふやうな事柄は不明である。彼等は畑を恰好の

貯藏場所と心得てをり、必要なとき丈に必要なる作物を掘り出すのである。これらの根類は完熟の時期を知らないから甚だ都合よく出來てゐる。

タロ芋は東印度に於けると同じくやはり土民の主食物である。これは濕地によく生育し、栽培も容易であるのでニューギニアの濕地にとつては大きな意義を有してゐる。

其他甘藷は彼等の家のまわりや垣に沿うて植えられるが、土壤の濕氣が甚しいため根は大きくならない。

ココ椰子は土産のものは多種多樣であつてパプア人にはその生活の總てゞある。果實は飲食物となり、樹幹は家となり、舟となり、葉は屋根を葺くに用ひられ、樹皮は衣服を給し、樹葉の纖維は篩等の日用品を作るに適する。

栽培業者は當初、椰子、ゴム、サイザル麻の栽培に力を注いだが、現在では少面積に珈琲、カカオ、玉蜀黍、甘蔗、陸稻、カポック等の新しい作物の栽培をも行つてゐる。

ココ椰子の栽培地は主として東區、中央區で河畔及び海岸に最も良く繁茂する。面積は一九三五年度には三萬三千七十四ヘクターで、ポートモレスビー南方には企業椰子園の二千ヘクターが海岸沿ひに四十八粁の長きに亘つて繰り擴げられてゐる。またポートモレスビー北方のヒ

シウでは優秀なコプラ生産高をあげてゐる。東區南岸では收穫は少い。

コプラは主として濠洲、イタリー、ドイツ、フランス等に輸出され、一九三五年度には一萬五百四十九噸、十萬六百八十一磅となつてゐる。

乾燥ココ椰子は殆ど濠洲に輸出され、その輸出高は一千五百噸である。工場はヒシウ、ギリギリ及びアヒオマにある。

英領パプアはゴム栽培の發展に特に努力してゐる。當局が支出する補助金の四分の一以上はこれに充てられてゐる。一九三五年までには一萬九千磅の助成金が一千噸の生産高をもつ三千六百ヘクターのゴム園に支拂はれた。

ゴムは中央區に於て最も多く生産される。中央區の栽培面積は二千五百ヘクター、東は三百五十ヘクター、デルタ區は四百ヘクターである。他の區は僅少である。因に一九三五年度に於ける栽培面積は六千五百二十ヘクターであつた。パプア人の採液勞働はマレイ半島に於て使傭されるものと甲乙がないといふ。

サイザル麻は乾燥氣候及び瘦地を好む。ポートモレスビーの奥地でこの栽培を試みたが良好な成績は擧げ得なかつたといはれる。尤も栽培面積は僅か百ヘクターにすぎない。

珈琲はこれに反し良好な成績をあげてゐる。それが栽培されるのは殆ど總て中央區である。英領パプアに於けるこの栽培面積は二百六十四ヘクターである。また北區のココダでは土民による栽培が行はれてゐる。

カポックの栽培も行はれ商業上有利であるといはれてをり、品質も良いが、栽培面積は八十八ヘクターにすぎない。

其他甘蔗は主として北區に於て作られるが、多くの意義を有し得ない。土民がこれを作るのは宴會や儀式に嚙み用として用ひるためである。陸稻は中央區に於て一九一九年から植えられ最初は教會が始めたのであるが、良好な成績を擧げなかつた。その後次第に分布し、一九三六年には百五十噸を産した。

當領の牧畜としては牛が首位で六千三百二頭、東區に多く當領の六九%を占める。次位は山羊で二千六百三十一頭、中央區がその五五%を占めてゐる。豚は八百六十二頭、中央區が四二%を、馬は六百五十頭で中央區が六七%を占めてゐる。家畜はララン草を除くには最も便利である。

(三) 鑛業

ニューギニアの鑛業に及ぶ前にその地質に就て一瞥すると、ニューギニアは太古卽ち第三紀の初期に、現在のアルプス山脈、ヒマラヤ山脈、ビルマ、マラッカ一帶に亙る古代地中海、卽ちテチス海の一部を形造つてゐたため、地質上から見ると東印度諸島の島々と一致した點が多い。然しまた既に動物のところで述べた如く、濠洲と似通つたところも多いのであるが、これは現在ニューギニアと濠洲とに分つてゐるアラフラ海がその昔は陸であつて、頻繁に動物の交流が行はれたためであらう。アラフラ海は極めて淺く、七十米位の深度をもつてゐるに過ぎぬことから見ても兩者の陸續きであつたことは推察される。

本島の地質は主として第三紀層よりなつてゐる。本島を東西に走つてゐる中央高山脈地帶は前第三紀層を示し、その外廓は第三紀層であり、南部の大平原、マックルーエル灣一帶、北部の海岸、セピック河、ラム河流域、ニューブリテン島等は何れも第四紀層である。その間に點々として新火山岩地帶が存在し、主なるものはフォーヘルコップ北岸、モミの奥地、ヤーペン島の一部、ビスマルク群島の大部分及び本島南端の方面、卽ち不死鳥の尾にあたる部分の海岸

に面した數ヶ所等である。

第三紀は地殼運動が激しく、アルプス、ヒマラヤ等の大褶曲山脈が出現した時代であり、石炭、石油の大部分はこの地層に含有されてゐるため重大な意義を有してゐる。火山岩地帶はその生成の性質上種々の鑛物に富んでゐる。

併乍ら、未探檢の地方も多いことゝてニューギニアの地質は明かでなく、最も信頼すべき地圖に於てすら多くの空白が殘されてゐるのを見るとき、現今知られてゐる鑛物の外に尙多くのものが埋沒してゐることは想像に難くない。

ニューギニアの地下資源としてこれまでに知られてゐるものは金、銀、白金、銅、鐵、錫、ニッケル、鉛、亞鉛、マンガン、石油、石炭、硫黄、燐鑛、オスリリヂウム等であるが、現在稼行されてゐるものは金、銀、銅位のもので甚だ僅少である。

イ、蘭領ニューギニア

當領で最も著名なのは石炭であり、フォーヘルコップのホルナ炭田では無煙炭を產する。ホーランヂア奥地のヨースセカント河附近では褐炭も發見されてゐる。

石油はマックルーエル灣のバボ附近一帶にある。油徴地としてはフォーヘルコップのブラウル河流域、ムトリ河流域等で、アラフラ海にのぞむエトナ灣では海中にて石油の匂ひが烈しいといはれる。太平洋岸のフェルカム河及びビリ河にもその徴候が看取せられるが、これらの油徴地は何れも現在どの位の埋藏量があるかは不明である。

金はフォーヘルコップのアンベルバーケン地方に於て噸當り〇・四瓦の金が含有されてゐることが知られてゐる。又マノクワリ南西方のワルモミ、ワルアモイに於ても鑛石を採集したが、これは輸送の途中紛失したためその成分は不明である。然しこの地方で砂金が發見されたことから考へると、確かに金は存在するものと思はれる。又ホーランヂア近くのシクロープ山脈にもあるといはれる。

シクロープ山脈には銀及び銅、其他石綿も認められた。フォーヘルコップのアンベルバーケンには金の外に銀、鉛、亞鉛も分析の結果抽出された。その南方にはニッケル及び褐鐵鑛のあることも知られてゐる。その外褐炭は多くの地方に發見せられるが、泥炭で良質のものではない。

當領の地下資源は右の如くであるが、これらは何れも活潑な企業には至つてゐない。然し、石油の試掘は大規模に試みられてをり、金や其他の鑛石試掘に關する計畫も進捗してゐる樣子

である。

南洋興發會社が蘭領ニューギニア北岸に事業地を獲得して活潑な農企業に乘り出すや、蘭印政府はその後の發展を恐れてか、廣大な地域に亙る試掘及び採掘の權限を急遽設立した二會社に與へた。その一は石油に關するもので、ハーグに設立された蘭領ニューギニア石油株式會社である。この會社の資本金は一百萬盾であつて、バターフセ石油會社、オランダコロニアーレ石油會社、オランダパシフィック石油會社が關係してゐる。會社は一九三六年一月一日より五十年間、約一百萬ヘクターの面積を有する地域に於て石油の試掘及採掘をなす權利を獲得したのである。その鑛區は會社が十年間試掘權を得た一千萬ヘクターの地域から撰擇するのである。この地域はフォーヘルコップから略々ローレンツ河に至る地域及びヘールフィンク灣の東北岸一帶である。會社はこの地域の地圖を作成するために飛行機を使用してゐる。その着陸場として各地に飛行場を設け、一九三五年末にはマックルーエル灣南岸のバボに基地を設け、こゝにその本據を置くことになつた。

他は同じくハーグに設立された蘭領ニューギニア鑛業株式會社である。この會社の資本金は三百萬盾で、オランダ及び英國系の會社が約半々の割合で出資してゐる。會社は蘭印鑛業法第

一條第一項に示された總ての鑛物の試鑛權を獲得したものである。金に關する試掘及び採掘權を有してゐる地域はフォーヘルコップ、アンベルバーケン地方の四十四萬二千四百ヘクター及び中央高山脈地帶の五百三十八萬五千五百ヘクター、計五百八十二萬七千九百ヘクターであつて、このうちから蘭領ニューギニア石油會社と同じく一定の時期の後、一定の地區を撰擇して採掘を行ふものである。

當領に於ては未だ探檢調査時代であつて、右の二會社がその衝に當つてはゐるが、現在のところ見るべき成果を擧げるまでには至つてゐない。

ロ、委任統治領

當領には金、銀、白金、銅、鐵、錫、燐鑛、硫黄、石油等である。經濟的意義を有するものは何といつても金であらう。當領では盛に稼行され、一九三七年度には四十一萬五千九百五オンスを産出してゐる。金はモロベ區に集中してをり、次いでセピック區に多く、その他は著しく少い。

一九一三年當領が未だドイツ領であつた頃、ドイツの地質學者はワリア河床に砂金があると

唱へ、マーカム河及びラム河にも存在し、ニューブリテンのベイニング地方にも存在すると稱した。その後一九二三年鑛山業者がブロロ河の支流コランガクリークで砂金を發見し採金を開始したが、未だ世の注意をひくには至らなかつた。一九二六年には濠洲の鑛山業者が同じくブロロ河の支流エディークリークで漂砂金鑛床を發見した。これが實に當地方の採金の非常なる發展をなした動機である。その後續々と企業會社が設立され、何れも産金開發に乗り出して急速に發展をとげた。次の産金表は當領に於て金鑛業が急速に發展したことを雄辯に物語つてゐる。

一九二七——	八年	三六、七四三砂
一九二八——	九年	一九二、五三六同
一九二九——三〇年		一三一、〇三二同
一九三〇——	一年	一五五、一〇六同
一九三一——	二年	四三七、〇六二同
一九三二——	三年	九三三、九四〇同
一九三三——	四年	一、三六七、六一六同
一九三四——	五年	一、八九七、二四四同

右の如く當領の金鑛業は急速に發達したのではあつたが、全くのところ飛行機が鑛石輸送に重大な役割を果したがために外ならなかつた。即ちモロベ區では金は海岸より離れた山中に產する。マーカム河支流に沿つてはゐるが船は上流まで溯航し得ない。而も道路とて全くなく、初期には山間の小道を土民苦力に鑛石を運ばすより手段がなかつた。ところが一九二六年時代のモロベ區長であつたセシル・ジエー・レヴィエンは、(一)大會社即ち大資本、(二)完全な交通機關、(三)大規模なる產金方法の三つが斯業の發展のためには必須であると考へ、八方奔走の結果、ギネア・ゴールド會社を創立するに成功し、飛行機による鑛石の運輸を開始した。一九二七年四月十八日、ニューギニアに最初の飛行機がラエからブロロ川流域のワウに向つて飛んだのであつた。それ以來航空業は發達し、現在では一寸旅行するにしても飛行機を利用するといふ狀態であり、設備も完備してゐる。暗黑といはれるニューギニアに近代文明の王者飛行機がかく頻繁に使用されてゐるといふことは、一つはやむを得ざる成行からであつたに相違はないが、ニューギニア鑛業の一特質を示すものであり、將來ニューギニアに近代產業が興つた場合、その性格を暗示するものとして甚だ興味ある事柄である。

モロベ區に於ける產金の中心地は、マーカム河支流ワト・ト川、ブロロ川、エディークリーク、コランガクリークであつて、其處にはブロロ金山會社、ニューギニア金山會社、其他幾多の會社があり、盛に活躍を續けてゐる。海岸の主要都市サラモア及びラエとこれらの產金地を結んで、飛行機がありとあらゆる物資及び人員の輸送に携はつてゐる。ギネア航空會社外多くの產金會社は何れもこの空中輸送に從事してゐる。

この地方で得た金は殆ど總て漂砂鑛床より採取したものである。それがために最新式の砂金浚渫機を數臺使用してをり、一九三七年に至るまでの浚渫量は尨大な數字に上つた。一例をあげれば一九三五年には浚渫量は千九十一萬五千五百立方碼で、それから得た金は一萬三千三百五十二オンス、銀は五萬二千六百五十二オンスであつた。發見されたときには我も我もとニューギニアを志し、資本の僅少なるもの、專門知識に乏しいもの等も多數この地に入り込んで一攫千金を夢見たのであるが、これらが成功する筈はなく、何れも次から次へと姿を消して行つた。金鑛業の發展のためにはこの三要素も亦缺くべからざるところで、その後、强大な數會社が進出するに及びニューギニアの金鑛業も新しい段階に入つたことが看取される。

當領に於ける地下資源のうち石油はセピック區の太平洋岸に於けるマタパウ及びその附近の

ワキオ河に沿うて存在し、一日四五ガロンを産出する。この地方から英蘭國境にかけた一帶が油徴地であるといはれるが、未だ地質學者の認めるところとはなつてゐない。一九二二年以來行はれた數々のボーリングに於ても何等見るべき成果をあげてゐない。なほ、フオン灣に面したフイッシュハーバーは最も期待せられてゐる。

銀はモロベ區の産金地帶から、金採取の副産物として得られる。アストロラベ灣北岸のフィニスター山脈では探檢隊が白金を發見したことを報告してをり、その附近のカベナウ河では純銅が發見され、また褐炭の存在することが明かである。アドミラルチー諸島中のバーデイ島では燐鑛が産出し、ニューブリテン島は火山帶にあるために各地方に硫黄が存在すると考へられるが、採掘されるには至つてゐない。ラバウル南方のベイニング山脈中では、鑛石分析の結果銅及び錫の存在することが明かとなつた。又この地方には赤鐵鑛が存在し、先年日本の專門家が調査に趣いたことがある。

ハ、英領パプア

當領は委任統治領と大體同じであるが、大宗はやはり金で、銀、銅、錫、鉛、亞鉛、石油、

石炭、鐵、オスミリヂウム、マンガン、硫黄、燐鑛等がこれに次ぐ。現在稼行されてゐるのは主として金、銀、銅である。

金は委任統治領に續く一帶の地方、南東海面の諸島等に多いが、西方のフライ河上流に於ても探檢隊によつて發見されてゐる。

委任統治領に續く北區では、ギラ河及びヨダ河の金鑛床が最も有名である。南東海面の諸島中で最も産出高の多いのはミシマ島及びウッドラーク島であつて、こゝには數會社が今尙盛に採掘を行つてゐる。ミシマ島南東のジュドエスト島（タグラ島）にも産し、又本島最南端のケヴェリ及びミルネ灣ではひと頃非常に盛であつたが、今は全く見棄てられてしまつた。

この二金鑛床は濠洲の鑛山業者によつて發見され、一時は非常に盛であつたが、彼等は單なる個人的の鑛山業者であり、濡手で粟の僥倖を夢見て冒險を試みはするが、專門知識及び資本に乏しいため決して永續きはしなかつた。そしてケヴェリ及びミルネ灣の如く最後には全く省り見られなくなつて終ふのである。中央區のポートモレスビー北方にあるラロキ河は最も早く發見された處であり、それは一八八七年であつた。現在なほ企業として繼續されてゐる。更にラロキ河の北方一帶の地は一時極めて有望であるといはれてゐたが、實際は左程でもなかつた

樣子で餘り成績は上つてゐない。アストロラベ山脈中では銅採掘の副產物として金が得られてゐる。デルタ區ではタウリ河にて發見されてゐる。

當領の產金額は年々區々であつて委任統治領の如く一貫した飛躍的な數字は得られない。一九三二年六月三十日までに全鑛山から得た金の產額は次表の如くであるが、發表の年と產出高とを比較してみると、當領の金鑛業の趨勢も自から明かとなるであらう。

金鑛床名	重量（オンス）	價格（磅）	發表の年
ウッドラーク	二〇七、八五〇	七一七、九九九	一八九五
ミシマ	一五九、二八八	三二一、二七五	一八八九
ヨダ	七六、八三二	二八七、一二八	一九〇〇
ギラ	六七、八七一	二五五、八九三	一八九八
ラケカム	三七、九一〇	一四二、三〇九	一九〇九
ミルネ灣	一四、二三〇	四九、九八七	一八九九
ケヴエリ	四、七七〇	一七、七三七	一九〇四
アストロラベ	四、二六三	一七、五四七	一九〇六
計	五七三、〇一四	一、八〇九、八七五	

ウッドラークとミシマは他に比較して良好な成績をあげてゐるが、この地方の鑛床は原生鑛床であることが一つの原因であり、企業會社により、最近の企業形態を利用して組織的な採掘を行つたことが他の原因であらう。

ミシマ島に於ける採金會社は數々の變遷を經て、現在ではカスパートミシマ金鑛業會社が最も活躍してゐる。其他多數の會社が豐富な鑛脈の近くに設立されて活潑な開發事業に忙殺されてゐる。然し一九三五年の中頃までに產出期に達したものはなかつた。パプア金山株式會社も亦一九三五年ウッドラーク島に試掘及び開發事業を開始した。又同年ルシエイド金山會社が組織されてジュドエスト島に於て試掘と土地開發に着手してゐる。

銀は普通金と共に得られる。ミシマ島では鑛石中の銀含有量は一般の比率に較べて幾分高く、ミシマオブシ・ンズ會社に關する最近の報告書によれば、こゝでは銀は金に比し、量、金額共に遙かに優れてゐる。ウッドラーク島に就ても同樣のことがいへる。

更に經濟的意義を有するものは銅である。その最も重要な鑛床はポートモレスビー南方のアストロラベ山脈南斜面に位してゐる。こゝでは一九〇六年から採掘を續けたが、一九二七年に至つて銅價の低落によりやむなく事業を中止した。前述の如く副產物として金が得られる。そ

の他には本島南端のシディア島が知られてゐる。

アストロラベ山脈には鐵も存在するが、これは總て赤鐵鑛である。この鑛石中には又マンガンも含有されてゐる。ウッドラーク島にもマグネタイトとして現はれてゐる。

鉛及び亞鉛は金銀鑛脈中に存在する。ウッドラーク島の鑛石標本は七五%が金屬鉛である。

錫はダントレカストウ諸島のファーグソン島及びノーマンビ島にあるといはれてゐるが、採掘は全然行はれてゐない。この諸島中では處々に硫黄が發見される。ファーグソン島では一日の採掘量四萬二千噸に上る鑛床がある。ウッドラーク島の東方にある面積僅か二エーカー余のカナック島には燐酸が存在する。

ギラ河金鑛床では良質のオスミリヂウムが得られたことがあるが、現在では殆どいふに足りないものとなつてゐる。

石炭はキコリ河上流に於ては存在するであらうといはれる。褐炭はパプア灣に注ぐラエ河に於て相當量存在してをり、その厚さも四十五米に達してゐる。

石油試鑿のために政府及び民間の會社が投じた金額は一百萬磅に上つてゐる。多數の專門家が當領に派遣され、測量をなしたが、採算のとれるまでになつたところはない。これらの事業

を行つてゐるのはニューギニア石油會社、オリオモ石油會社、ヴォーゲル石油會社、パプア石油開發會社等であるが、最も重要なものはアングロペルシヤン會社で、この會社はガルフ區で種々試鑿を試みたことがあつた。これらの調査の結果最も有望なものはパプア灣岸のプラリ河及びヴァイララ河流域であるといはれる。

次に鑛業法規に就てみよう。

蘭領ニューギニアに適用される鑛業法規は勿論蘭領東印度全般に適用されるものと同一である。蘭印政府は日本人に對しては鑛業權を與へなかつたため、我々日本人が鑛業に從事することは不可能であつた。

英領では委任統治領にせよ英領パプアにせよ各々獨自の鑛業法規を有してゐるが、異つてゐるのは微細な點のみである。

鑛業を營むに當り借地權を得ることを要するが、委任統治領ではこれは金山借地權と鑛山借地權の二つに分れてゐる。鑛山權は毎年一磅を支拂ふことにより十年間有効であり、その面積は四百米四方以内である。一九二八年—一九三六年の鑛業法規によれば、行政長官は鑛山所有者に獨占的試掘權を附置する。然しこの面積は七千ヘクターである。入國のためには入國許可

書を必要とし、更に奥地に入る場合には行政長官の許可を要する。採掘權は一年一エーカーにつき二磅十志を支拂へば廿一ヶ年間に亙る採掘權を附與される。然しその面積は二十ヘクターを限度としてゐる。砂金採取を目的とする浚渫權は鑛山監督局に申請すると下附される。金鑛以外の鑛物に就ては鑛區權は百ヘクターを限度として廿一ヶ年未滿の一定期間下附される。借地料は一年一磅五志である。然し現在では鑛山權は東洋人には與へてゐない。

英領パプアの鑛業權は金採取と金以外の鑛物採取とに區別し得る。鑛業權を得るには一年百志の許可料を必要とする。金採取の目的を以て試掘をなさんとするときは、未だ鑛業權の存在しない地域に於て法定の制限の下に試掘地域を定められる。金採掘權に對しては一エーカーにつき年一磅の稅を課す。期間は廿一ヶ年である。尙試掘地域が確定したあと七日以內に作業に取かゝらねば試掘を禁止し、採掘は十四日以內にこれを開始せねばならぬことが規定されてゐる。

鑛業權は副總督によりアジア人にも許可せられることになつてゐるが、現在のところその實現したものはない。

(四) 林　業

イ、蘭領ニューギニア

ニューギニア全島は全く原始の儘の形を呈し、千古斧鉞を入れぬ熱帶處女林が隙間もない程に生ひ茂つてゐる。奥地と海岸とを問はず巨木が畫なほ暗きまでに密生してゐる。ナビレの南洋發當會社の事業地に於てすら一歩奥地へ踏み入ると、十米先の展望がきかないといふ事である。以てその一端が覗はれよう。

從つて有用材である熱帶樹は無盡藏にあるものと見られてゐるが、未だ完全な調査は行はれず、企業として見るべきものはない。

硬木としては、鐵木、黑檀、紫檀、カユスネール、ビンタンゴロ、ラサマラン等があり、建築用材、枕木、家具材、或は造船用として利用せられる。

軟材としては、海拔三百米以上の山地には檜材の代用となるもの、及び山桐に類似するものがあり、またラワン、バルサ、マイソ、クリラワン、クリサボン等がある。ロタンは到る處に產し、殊にフォーヘルコツプに於てはオランスバリのものが良質である。サムソン河の南岸に

も僅かにある。其他タンニンを採取する熱帶樹、肉豆冠等が得られる。マングローブは海岸の到る處、本島と島嶼とを問はず大密林となつて繁茂し、土民は家屋の柱に使用する。木質は硬くて耐久力がある。

當領で最も經濟的價値を有するものはコパルである、主として南洋興發會社がナビレで採取してゐる。これはパラオを經由して日本に輸出される。其他の地方で生産されるものは殆ど總てマカッサルに送られる。マカッサルはニューギニアのコパル取引のみならず、全世界の十分の九を産する東印度コパルの五分の四を取扱つてゐる。コパルは一九二六—七年、極樂鳥の狩獵が禁ぜられて以來、住民の重要なる生活の糧となつてゐる。

マノクワリ及びファクファクには山林局の管營製材所があり、鐵木其他の製材をなし、官廳用材として使用せられるものである。一日約百五十立方米の製材能力があり、その厚木はビアック島の鐵木をK・P・M・で運んでゐる。

當領に於ける木材輸出の第一位を占めてゐるのは西ニューギニア、マックルーニル灣に臨むコカスであり、販路は主としてテルナテ及びハルマヘラ群島である。

有用材の主要なるものは、二千—八千米の高地にある松、ユーカリ樹、ナウデニアナ等であり、叢林中にはマングローブ、ロタン、白檀、ゴム、ダマル等の樹脂木がある。洋杉はモロベ地方にあるが、何れにしても交通機關の不備がこれの輸出に大なる障害となつてゐることは全ニューギニアに共通した點である。

當領には四つの製材所があり、そのうち三ケ所は教會が所有してゐる。東北ニューギニアの教會は最新式の挽材機を所有してをり、ニューブリテンにも製材工場がある。またモロベ區には金山用の製板機がある。

森林の商業的開拓の最良方法は、パルプ、アルコール、纖維品、樹脂等の製造であらう。

森林法によつて使用を許可された森林面積は二萬九百三十ヘクターである。挽材の生産高は概算百三十萬平方呎で、九木のものは三百十萬三千九百九十六平方呎で、これは濠洲に輸出される。

ハ、英領パプア

從來輸出品として最も重要であつた木材は白檀であつたが、接近し易い地方では濫伐せられたため近年衰へた。其他經濟上有利なる熱帶植物は到る處にあり、殊に河川又は海岸の近くに發見される。一例を擧げれば、ヴァイララ河流域のみにても約四十億平方呎と見積られてゐる。平原の林地には熱帶樹種豐富にして、就中白檀及び黑檀は最も重要である。高地には溫帶植物に類似し四千米の高處では絲杉が多い。

樹種、量共に豐富ではあるが、今日まで輸送機關の不備のため、當領はかへつて木材の輸入者の地位にあつた。一九二七年度には一萬三百二十磅の輸入を見たが、それ以後漸次減少して一九三三年度には一千九百九十五磅となつてゐる。

(五) 水 產 業

イ、蘭領ニューギニア

南ニューギニアのアルー諸島バボを中心とした附近は、パラオが根據地となる以前に於ては邦人の眞珠採取業の中心地であつた。木曜島に於ける邦人の發展は明治二十六年に始まり、其他幾多の變動を重ね、昭和十三、四年頃には最盛期に達した。然し、現在は以前程は振はない。僅かに仲道甚平其他三氏等の個人企業である。邦人從業員は十八名位である。

當地方の產出高としては眞珠貝の外に高瀨貝、海鼠等をも合して一九三四年には五百五十噸であつた。

漁獲物として擧げ得るものは、眞珠貝、高瀨貝、鼈甲、海鼠等で、魚には鰯、鰹、鮫、鰤、鯖等があり、またヘールフィンク灣西岸には魚族も多いといはれる。

將來當領で有望なものは鰯と鯖であり、其他各種の魚も獲られるが、多くは商品としては不適當である。然し、土民の食糧としては好適のものである。また鮫も有望である。海岸沿ひの淺海では各種の魚が各種の方法で獲られる。土民は昔から銛を使用し、現在はカヌーを操つて釣具をも使用してゐる。この釣針、釣糸が日本製であることも面白い。また網も用ひられ、多くは投網である。

淺海外の政府に屬する水面は漁撈を行ふのに許可がいるが、西ニューギニアではこの漁業に

は主としてチドール人、テルナテ人等が從事してゐる。

龜も捕獲され、各種の貝類は昔からニューギニアの主要な産物である。現在はK・P・M・がこの輸送に當つてをり、一九三五年には八十九噸の貝類を輸出した。

ロ、委任統治領

漁獲物は高瀨貝を主とし、廣瀨貝、夜光貝、海鼠がこれにつぐ。鰹、鮪も澤山廻游してゐる。高瀨貝、夜光貝は當領海岸到る處に棲息するが、北東ニューギニア沿岸には棲息せず、水深十尋以下普通五六尋の場所が主要漁場である。

ビスマルク群島沿岸は古來有名であり、特にアドミラルチー諸島、ハーミット島群に多い。舊獨領時代より邦人の出漁するものが多數あつて、根據地はラバウル、マヌス或はブカ等であり、ブカ島に産するものは上等品であるといふ。

高瀨貝は殆どすべて輸出せられる。一九二八年度は四百九十噸であつたが、爾後次第に減少し、三七年度には百六十一噸、一萬二千四百七十八磅になつた。ビスマルク群島及びソロモン群島では良質の龜が獲られる。

ハ、英領パプア

當領に於ても漁獲物は前二者と異るところがない。眞珠貝は對岸濠洲の木曜島が有名であり、當領は左程多くない。

トレス海峽では一八六八年より潛水夫によつて眞珠貝を獲つてゐた。これらの潛水夫は主として日本人であり、獨占的地位を占めてゐたことは余りにも有名である。一九三四年度の眞珠貝の輸出は二十三噸、一千六百四十一磅であり、各種の貝殼の輸出は百七十八噸、一萬百五十五磅であつた。トレス海峽の島々に於ては古くより鰯を竹の網代で獲つてゐた。現在は投網が使用されてゐる。マレイ島は濠洲の會社があつて鰯の鹽漬、乾魚等の輸出を行つてゐる。

海鼠の輸出は蘭領よりも英領に於て重要であり、當領の輸出は十噸、委任統治領では三十九噸である。

(六) 交　　通

イ、蘭領ニューギニア

中央には高山脈が聳えて南北を分ち、東西の交通は急流、峡谷によつて甚しく妨げられてゐる上に、未開拓の現狀では滿足すべき陸路は全くない。僅かにマノクワリの近傍に四五粁の歩道があるにすぎない。强ひて道路と名付けられるものは主なる植民地の周邊にあるのみで、他は殆ど土民の踏みつけ道である。部落や植民地が商業上重要性を帶びてくると、これが改修せられて道路となるが、直ちに雜草によつてもとの狀態にかへつてしまふ。鐵道は全くない。

河川は主要なる交通手段で、探檢隊も殆ど河川を溯ることから始めたのである。吃水の淺い船で溯航し得る河川は、マンベラモ河、ノールドウエスト河、ヂグール河等で、夫々百十粁、四十五粁、六百四十粁まで溯航が可能である。

最も重要なものは海運である。現在當領海運は總てK・P・M・によつて運營されてゐる。同社がニューギニアに寄港を始めたのは一八九一年以來のことで、最初は寄港地も九ケ所であつたが、今日では十七ケ所に達してゐる。

船路はアンボイナーニューギニア西岸線では三週に一回の割合で、バボ、コカス、ファクファク、カイマナからドボを周航する。マカッサルーアンボイナーニューギニア南岸線はアラフラ海諸島からドボに寄港し、メラウケに至るもので、三週一回の寄港である。マカッサルーアン

ボイナーニューギニア北岸線ではサオネ、ソロン、マノクワリ、ワシオル、スルイ、サルミ、デムタ、ホーランヂア、ボスニック及びマビアに寄港する。これも三週に一回であるが、その時々の情勢によつて一航海に一二港若くは二航海に一港の寄港を行ふ。其他には蘭領ニューギニア石油株式會社の社船がバボとエフマン間を二週に一回往復してゐる。

邦船としては南洋興發會社の社船が、南洋群島パラオとマノクワリ間にヌシ丸を二ケ月に三回就航せしめてゐる外、各事業地間には大東丸が就航する。この二船に就ては前述したところである。

當領に移入される物資は、石油及び金の二特權會社の活動により急激に增加した。最近では約二千五百噸から三千五百噸といはれてをり、主として生活必需品である。K・P・M・が殆ど獨占してをり、一年間に約四十隻の入港を見てゐる。然し、移入よりも移出の方が重要である。一年五千噸から七千噸で、コプラ、コパール、木材、肉豆冠、肉豆冠花等が主要なもので貝殼類、海鼠、黃木、鐵木、鮫皮、マソーイ皮、ロタン、棉花及びカポックも少量運ばれる。主要貨物であるコプラはその量が常に變動する。殊に南岸に於て著しい。これらは殆どK・P・Mが扱つてゐるものである

ニューギニアの如く非常に廣大で且つ殆ど未知の、然も交通困難を極める土地にあつては、土民及びその耕地、森林、平野、山路、道路、鐵道、水路、飛行場適地、湖水、水上機着陸適地等を短期間に知るには、航空機を使用する空中偵察が非常に便利な方法である。これと平行して南領に於ても航空路の計畫が進められ、アンボン、バボ、ドボ、タナメラを結ぶ線が考慮されてゐる。またファクファク、バボ、マノクワリには蘭印航空會社（K・N・I・L・M）の空路が伸び、ジャバから僅か三日で到達し得るようになつた。然し未だ内地との連絡は期待し得ない狀態にあるが、一昨年より毎週一回ウイッセル湖畔へ飛行機が飛ぶことになつた。使用機は蘭印航空會社所有のグラマン水陸兩用機である。これは前記の如き定期航空ではないが、個人の輸送にも應じてゐる。

飛行基地の設置は極めて困難であるが、現在あるものを擧げると、先づ陸上基地としてはバボが蘭領ニューギニア石油會社の本據で最も重要であり、ホーランヂア、サルミ、マノクワリ、ソロン、イナワタン、ファクファク、ヤベロ、マビ、タナメラ、メラウケ等にも各々飛行場がある。

水上基地として擧げ得るものはアマル湖、ニサ湖、ヤムール湖、ウイッセル湖、カイブス、

ドッセルドルプ湖、センタニ湖及びエトナ灣等である。

通信機關としては、マノクワリ、スルイ、ホーランヂア、ソロン、ファクファク、メラウケに無線電信の設備があり、ホーランヂアのみは受信設備丈であるが、發信設備の架設の計畫がある。これらの地方には補助郵便局があり、一般郵便事務を取扱つてゐる。

ロ、委任統治領

鐵道は全く存在しない。然し、當領は南領と比較すれば多少道路もある。殊にニューアイルランドニ於ては既に獨領時代から若干の道路が敷設されてゐた。即ち、北端のカビエンからナマタナイに至る北岸沿ひに走るもので、一九一一年には百六〇粁の延長を有してゐた。これは一九三六年に完成され、またカビエンから南岸沿ひに百十粁の道路も走つてゐる。ラバウル附近も亦開けてゐる。最近の道路總延長は一萬四百八十二粁である。そのうち一千八十六粁が車道で、その余は馬道である。車道はニューブリテン及びニューアイルランドに開け、當領の車道の六四％を占める。馬道はモロベ區及びマダン區に開け、ニューブリテン、セピック區がこれにつぐ。

當領では鑛山の開發が盛んであつて、その生産費の遞減を計るため各鑛業會社によつて道路敷設の計畫が進められてゐる。

河川としてはセピック河が最も重要で、十呎乃至十三呎の吃水の船ならば四百八十粁の溯航は可能であるといはれる。

當領に於ける海運はバーンズ・フィルプ會社、イースタン・オーストラリアン汽船會社、ノルト・ドイチェル・ロイド會社、W・R・カーペンター會社等がその衝に當つてをり、邦船としては大阪商船會社、南洋貿易株式會社の船がある。バーンズ・フィルプ會社は濠洲政府と契約を結び、その濠洲—ニューギニア間の航路は命令航路となつてゐる。

同社は、シドニー—パプアーニューギニア線、シドニー—ソロモン群島—ラバウル線、サマライ—ミシマ線を有する。それぞれ三週一回、六週一回、三週一回の航路である。

シドニー—パプアーニューギニア線はシドニーを起點とし、濠洲東岸、パプア諸港を經て、ラバウル、リンデンハーフェン、サラモア、マダン、カヴイロ、ウェワク、レンガヌ、ボンドの諸港を經て復航に就く。その間約一月を要する。シドニー—ソロモン群島—ラバウル線はブゲインビルのキエタ、ヌマヌマ、ラバウル、ソラカンに寄港し、サマライ—ミシマ線はこの間を

往復する。

イースタン・オーストラリアン汽船會社は香港、シドニー間を就航し、途中ラバウルに寄港する。ノルト・ドイチェル・ロイド會社は香港を起點としてニューギニア、ソロモン線を有し、マダン、サラモア、ラバウル等に寄港する。八週一回である。W・R・カーペンター會社はロンドンより發してラバウルに寄港する。

大阪商船は濠洲航路の往航のみラバウルに寄港する。南洋貿易會社はサラモア線及び南太平洋線で、高千穗丸が年四回、カヴィエン、ラバウル、サラモアに寄港する。南太平洋線は年二回の就航で、同上寄港地の外パプア領にも寄港する。

當領は島嶼も多く蘭領よりも比較的開發されてゐる結果、交通も開け、海運は右の如き現狀であるが、なほ重要なるものは航空路の發達である。前述の如く、當領に最初の飛行機が飛んだのは一九二七年であつたが、爾來鑛業の發展と共に運輸機關としての飛行機は長足の進歩を遂げ、濠洲との定期航空、鑛山間の運輸等が行はれてゐる。

現在の主要會社はギネアの航空會社、ホールデンス空輸會社、W・R・カーペンター會社、太平洋株式會社等である。

定期航空路はシドニー―ラバウル航空路、ニューギニア金山航空路、ワウ―ボートモレスビー航空路がある。前者はW・R・カーペンター會社と濠洲政府間の契約によるもので、ボートモレスビー、サラモア、ラバウルを結ぶ。使用機はハヴィランド型十人乘り機二臺で、週一回の飛行である。後者は數會社がこれに從事してゐる。モロベ區は最もよく開け、以前はラエ―ワウ間の道路にては八日間も要したものが、現在では僅か四五十分で充分であるし、日用必需品、鑛山用機械、更に牛、羊、雞等も空路にて運ばれる。

最近の飛行機數は三十九臺、飛行場は官有、公設、官設不時着陸場とともに四十五ケ所の多きに上つてゐる。一年間の輸送人員は一萬三千名、空輸貨物は一萬噸を超えてゐる。然し航空事故は統計によると誠に少い。

通信機關としては、電信所は濠洲のアマルガメイテッド無線會社の獨占するところとなつてをり、ラバウル近傍のビタ・パカに强力な無電設備があり、シドニー及びタウンスビルのA・W・A・無線電信所を經由して全世界の通信を接受する。カヴィエン、キエタ、マヌス、マダン、アイタペ、サラモア、ワウにも電信所がある。

また、ラバウル、ココポ、ニューブリテンには廣大な電話網が張られてゐる。

パプア英領パプア

當領の道路は開發の進んだ地方以外には全く存在しない。即ち、各鑛山地方及びボートモレスビー等には自動車の疾驅に適する優秀な道路がある。然し何れも短距離である。中央區はボートモレスビーを中心に當領中では最もよく開け、同市から四十粁の自動車道路が、ケンブウエルチからコポゴに至る二十四粁の道路がある。馬道は南岸に發達し、百六十粁である。

河川としてはフライ河が最長である。汽艇によるときは八百粁の、ブラリ河に於ては二百粁の溯航が可能である。

海運は前記のバーンズ・フイルプ會社の汽船が濠洲と當領とを結んでゐる。シドニー―パプアーニューギニア線ではボートモレスビー、サマライ及びユーレ島、ウッドラーク島に寄港する。

沿岸航路はS・S・トレイディング會社がボートモレスビーを中心として西はダルーを經て木曜島まで、東はサマライを經て領境までパプアンチーフ號を就航せしめてゐる。

定期航空は前記のシドニー―ラバウル線がボートモレスビーと前記地方を連絡する外、ボー

トモレスビー、モロベ金山間にはギネア航空會社の飛行機が就航してゐる。またココダ、ラケカム等の金山の中心地へ定期に飛行する。郵便物、貨客を輸送する。

通信機關では、無電所はポートモレスビーとサマライにあつて、濠洲、委任統治領間等すべての通信を行ふ。これはアマルガメイテッド無線會社の經營である。ポートモレスビーでは電話は完備してをり、その幹線はロウナ、ラロキ、ブートレス、インレット間に延びてゐる。

郵便も全般的に見れば未だ不完全である。中心都市は比較的完備してゐるが、奥地では武裝警官が晝夜兼行で郵便物を運搬するといはれる。

(七) 商業、貿易

ニューギニアの各領域に於ける對内商業は分つて三種とすることが出來る。卽ち歐人對歐人歐人對土民、土民對土民のそれである。最初の二者に關しては以下の貿易の項を見られたい。土民對土民の商業は經濟上は重要でなく、殆ど商業といふ名を冠し得ない程のもので、原始的野蠻と石器時代の文明と兩々相對立して、商業組織の存在を發見することは興味なきにしも非ずと云ひ得よう。

これは物々交換であつて、魚類は農産品と、陶器はサゴと、貨幣は土器又は鸚鵡と、蓆及び衣類は蔬菜類と交換し、其他枚擧に遑がない。ラフラン諸島の成年者は同島に栽培し得ない食糧品を求めるために年々隣接諸島へ交換の遠征を試みる習慣があり、その光景は偉觀であるといはれる。

貿易は各領とも完備した統計の具つたものはない。從つてその趨勢を覗ふにしても極めて漠たるものとならざるを得ない。

イ、蘭領ニューギニア

當領の數字は英領に比すると極めて不備である。一九三六年の輸出は次表の如くである。

品名	數量(噸)	價格(盾)
コプラ	4,499.6	475,268
コパル及ダマル	1,900.2	205,770
木材	1,239.0	55,755
肉豆冠	502.5	124,575
肉豆冠花	80.2	54,770
貝類	66.3	7,725
海鼠(規那)	1.5	225
樹皮	34.4	932

一九三六年度の輸出總計は七千四百五十噸、九十九萬四千五百五十六盾であつたが、恐慌直前の一九二九年には二百二十六萬四千二百二十八盾であり、恐慌の當領に及ぼした影響の如何に大きかつたかが判る。最も不況なのは一九三四年であつたが、それ以後は次第に恢復してゐる。

コプラは古くより重要な輸出品であつた。一九一〇年以來次第に增加し、一九二九年には四千四百噸、七十四萬四千六百十二盾に達したが（價額の最高は一九二六年の九十萬九千百三十六盾）それ以後は世界恐慌の余波を蒙つて多少減少し、一九三五年には四千六百二十二噸、二十五萬七千五百七十二盾となり、翌年は前表の如くなつてゐる。

當領を南、北、西の三地方に分けると、コプラの輸出は南ニューギニアが最も多く、北、西地方の順となる。コプラは殆どマカッサルに集められ、ジャバ、アメリカ、歐洲特にオランダ、デンマーク、ドイツ、更に日本へも行く。

コパル及びダマルも重要なものであるが、その數量、價格の變動は甚だしい。最盛期は一九二七八年で數量は各々三千七百七十噸、三千百九噸、價額は一萬四千九百四十盾、一萬四千七百六十三盾であつた。

北及び西ニューギニアから輸出を見るのみで南ニューギニアは全く零である。マカッサルはこの輸出にも大きな役割をなしてゐる。當領のコプラは總てこゝに集るといつても過言ではなく、一九三四年には全體の一七％を占めてゐた。前記の小表以外に日本へ輸出されるものが四百四十噸に上つてゐる。

木材の輸出量はこれまた變動が劇しい。西、北ニューギニアよりアンボン、テルナテに向けられ、その主要輸出港はコカスである。近時蘭領ニューギニア石油會社が活躍を始め、その消費に充てられるため幾分減少してゐる。

其他の品目も多くマカッサルに集つた後各地に輸出され、K・P・M・汽船がその輸送に當つてゐる。これにはまた華僑の勢力を見逃すことが出來ない。華僑は各地に散在して店舗を構え土民と歐人間の仲介等を營む。その店舗數は二百二十である。

なほ過去の產物となつたものは極樂鳥がある。一九一三年頃より一九二五年頃までは六—九十萬盾臺を維持してゐたが、以後急激に減少し、一九三一年には僅か百二十五盾に轉落してしまつた。これらはホーランヂア、デムタ、サルミ、アンスス、コカス、ミミカ及び特にメラウケから輸出されたものであるが、正確な統計は存在しない。

一九三六年に於ける主要品の輸入は次表の如くである。

品名	數量(噸)	價額(盾)
米	1,439.9	119,352
粗粉類	118.8	6,060
砂糖	179.6	8,360
食糧品	286.0	7,041
煙草	83.9	117,625
セメント	276.0	3,840
石油類	361.2	13,608
機械製品	62.0	11,250
織物雜貨	834,0	408,000

一九三六年の輸入總額は四千四百三十四噸、百三十四萬六千百二十九盾であつた。米は最も興味のある輸入品である。輸入高は主としてパプア人以外の者の數に左右されるのであるが、最近著しく發展して來た農企業のパプア人契約勞働者の數に係ることも少くない。その主要なる輸入港はマノクワリ（三百一噸）、ファクファク（百六十四噸）、メラウケ、バボ、ソロン、スルイ等である。

石油類、セメント、機械類等は蘭領ニューギニア石油會社の事業開始により、或は定期航空の開始により最近は漸增してゐる。

次に輸出入のバランスを見ると、一九三四、五、六の三年間に就て次の如き數字が得られた。

	一九三四	一九三五	一九三六
輸出（千盾）	三七二	五〇八	九四九
輸入（千盾）	八二八	一、二一七	一、三六三
差	(−) 四五五	(−) 七一一	(−) 四一四

この簡單な表から見て當領は常に輸入過超であることが判る。一八九二年には輸出四十六萬二千盾、輸入二十六萬五千盾、差引十九萬七千盾の輸出超過であり、一九〇五年には輸出七十二萬五千盾、輸入二十八萬八千盾、四十三萬七千盾の輸出超過であつたことを考へると極めて示差に富むものがあらう。また、一九〇五年と一九三五年に於ける輸出額を見ると、後者に於ては約七〇%の增加を見せてゐる。一見迅速なる膨脹を示してゐる如くであるが、委任統治領の一六〇〇%、英領パプアの三〇〇%に比すれば當領の開發の遲れてゐることが知られる。

ロ、委任統治領

當領の統計は七月一日から六月三十日を以て一年としてゐる。從てこゝに一九三六年とあるは一九三六年七月一日より一九三七年六月三十日までであることを示すものである。

輸出は次の如くである。

品名	1936		1937	
	數量(噸)	價額(磅)	數量(噸)	價額(磅)
コプラ	76,409	1,231,309	73,716	847,734
乾燥ココ椰子	1,632	86,390	1,579	73,423
貝類	238	26,960	161	12,478
海鼠	15	1,350	30	2,250
象牙椰子	59	767	18	162
コプラ屑	443	4,430	402	1,759
椰子果	71	710	147	882
カカオ	132	6,600	179	4,475
珈琲	51	4,100	41	1,025
落花生	15	225	4	84
屑鐵	45	90	—	—
銀	—	—	1,000	225
ゴム	—	—	4	242
プラチナ	—	—	2	15
鼈甲(封度)	50	50	91	91
木材	—	2,745	—	6,510
金(オンス)	373,197	2,020,667	410.058	2,028.980
其他		2,139	—	25
計		3,389,072		2,980,360

當領に於ては金の產出が多く、その輸出は最高位にあるが、これに就ては既に述べたところである。コプラがこれに次いでゐる。コプラの仕向地は主として濠洲、ドイツ、オランダ、メキシコ、スエーデン等で、日本は僅かに三百六十八噸である。一九三〇年前後にはアメリカにも輸出された。同年の輸出は一萬二千五百七十七噸であつた。

獨領時代にも既にコプラの輸出は行はれてゐた。その後漸次增加の一路を辿つて來た。左の小表はこの趨勢をよく示してゐる。

年次	噸
1884	1.300
1896	1,500
1898	2,500
1904	4,400
1905	4,916
1906	4,391
1907	5,694
1908	6,285
1909	8,653
1910	9,244
1911	9,553
1912	11,279
1913	14,526
1915	20,513
1916	18.582
1917	19,708
1918	14,886
1919	22,708
1920	23,735

年次	噸
1921	26,000
1922	34,648
1923	34,974
1924	39,151
1925	45,800
1926	47,600
1927	65,285
1928	60,435
1929	63,832
1930	62,303
1931	59,452
1932	59,040
1933	62,270
1934	56,251
1935	66,684
1936	76,409
1937	73,716

爾後濠洲委任統治領となつた。

これに次いで重要なものは乾燥ココ椰子であり、カカオ、珈琲の輸出も相當額に達してゐる。蘭領と異り、當領に於ては鑛物殊に金の輸出が多い。銀、プラチナも輸出される。

當領に於ける極樂鳥の輸出は一九二一年に全く禁止された。それまで多い年は六萬一千五百七十九磅（一九一三）にも上つたが、その後變動甚だしく一九二一年には二千二十七磅にすぎなかつた。

輸入は次表の如くである。

品名	1936 價額(磅)	1937 價額(磅)
食糧品	380,225	400,433
煙草	59,045	58,155
織物及纖維	156,462	186,781
油脂類	71,404	83,124
鑛石鑛物	14,039	16.030
金屬機械製品	431,216	653,991
ゴム皮革製品	13,810	15,663
其他	185,422	214,780
計	1,311.623	1,610,967

其他としてあるもののうちには木材、セメント、紙類、藥品、雜貨等を含んでゐる。木材の輸入は各々二萬八千八百六十磅、三萬三千五百六十五磅である。

食糧品のうち米に就て見ると、

一九三三	一九三四	一九三五	一九三六	一九三七
五、七六〇(噸)	六、七三〇	八、四二〇	九、〇六八	一三、九一〇
四七、三四七(磅)	五二、八五六	七三、三四二	八九、四六一	九〇、六九九

即ち毎年著しい增加を見せてゐる。前述の如くこれはバブア人契約勞働者に關係することが多大である。一九三三年以來三七年までの契約勞働者數は、三萬六百人、三萬四千人、三萬七千人、四萬三百人、四萬二千人と增加してゐる。產業開發と共に勞働者は增加する一方であるのに米作は殆ど見るべきものがない。ブロロ金山地方では飛行機によつて米を輸送してゐる。ラエ及びサラモアから約七千人の勞働者のために送られる米は年々千五百噸以上に上つてゐる。

煙草の輸入も他の二領と共に多く、其他消耗品の輸入の多いことは必然的な傾向である。

輸入先は濠洲が第一位に、次いでアメリカ、イギリスの順序となつてゐる。濠洲は殆ど四〇

%を占めてをり、アメリカは最近殆ど濠洲と肩を並べるところまで躍進してゐる。

當領は蘭領に比し、鑛產の輸出が多額である結果毎年出超を示してゐる。一九三六年度に於ては二百七萬七千四百四十九磅、三七年度に於ては百三十六萬九千三百九十三磅であり、三六年度に於ては輸入額を遙かに超過してゐる。

ハ、英領パプア

當領の年度も委任統治領と同じく七月一日より六月三十日までを一年とする。

一九三六年度に於ける當領の輸出は左の如くである。

品名	價額(磅)
コプラ	191,808
ゴム	124,174
乾燥ココ椰子	47,137
珈琲	7,536
海產物	20,097
金	91,775
雜貨	41,474

コプラの輸出は當領に於ては最も重要であり、一九三四年度には八千五百九十噸、翌年には多少增加して一萬一千六百三噸となつてゐる。ポートモレスビーはその約ばを輸出して、次位はサラモアである。主として濠洲に向けられるが、古くはイギリス、スペイン、フランス、イタリー及びアメリカにも輸出された。最近はまたアメリカが委任統治領と同じく重要な役割を果しつゝある。乾燥ココ椰子の需要は殆ど濠洲に限られてゐる。

更に注目すべきはゴムの輸出であつて、一九三四年度には一千六十九噸、七萬九千三十一磅、三五年度は一千九十七噸であつた。委任統治領に於ては獨領時代に相當の輸出もあつたが現在は當領の方が盛である。その九〇%はポートモレスビーから積出される。

輸入のうち主要なるものは食糧品であり、約四〇%を占める。これに次いで機械製品で鑛業の發展と共に增加して來た。他の二領と同じく煙草も多い。

當領に於ける輸出入のバランスは一九三〇年までは入超で同年以來出超を示してゐたが、一九三六年度に於て再び入超に轉じてゐる。

次に蘭領ニューギニア、委任統治領、英領パプア各三領の輸出入の比較をしてゐると、

領 / 年次	蘭領			委任統治領			英領パプア		
	（千 盾）			（千 磅）			（千 磅）		
	出	入	差	出	入	差	出	入	差
1920	—	—	—	916	589	+ 327	173	372	− 99
1921	—	—	—	499	469	+ 30	220	306	− 86
1922	—	—	—	631	516	+ 115	179	315	−136
1923	—	—	—	719	486	+ 233	239	355	−116
1924	—	—	—	598	538	+ 321	368	459	− 91
1925	—	—	—	1,105	568	+ 537	649	471	+178
1926	—	—	—	1,080	661	+ 419	454	456	− 2
1927	—	—	—	1,471	812	+ 659	350	404	− 54
1928	—	—	—	1,146	871	+ 275	337	361	− 24
1929	2,264	—	—	997	882	+ 115	325	374	− 49
1930	1,256	—	—	919	750	+ 169	274	240	+ 34
1931	655	—	—	1,109	780	+ 329	269	222	+ 47
1932	392	—	—	1,581	912	+ 669	267	218	+ 58
1933	357	—	—	1,766	924	+ 842	249	221	+ 28
1934	373	828	−455	2,341	948	+1,393	295	270	+ 25
1935	506	1,217	−711	2,573	1,291	+1,281	355	318	+ 37
1936	949	1,363	−414	2,980	1,610	+1,370	524	452	+ 72

（磅の盾に對する比率は一九三〇—三一年、一〇・二五盾、三一—三二年、七・七五盾、三二—三三年、六・七五盾、三三—三四年、六・四〇盾、三四—三五年、六盾、三五—三六年、七・一五盾）

この小表を一瞥すればニューギニア全島に於ける貿易の趨勢を覗ふことが出來よう。蘭領ニューギニアの數字は極めて不備で、僅かに最近の數ケ年より判斷する外はない。

六、主要都市

イ、蘭領ニューギニア

「マノクワリ」は、フォーヘルコップの東北端、ヘールフインク灣の西岸に位し、ドレ灣に臨んでゐる。前面にはマンシナミ、レモンの二小島があり、水深は二十五尋乃至三十尋で天然の良港をなしてゐる。

氣溫は年平均七十九度で、統計によれば最低氣溫は七十・五度、最高は九十一・二度である。相對濕度は八七%、一年の降雨量は二千五百粍である。降雨日數は二百十日である。

北ニューギニア分州の主都にして、政治、經濟、社會の中心地であり、副理事官、內務監督官以下の官吏が駐在し、オランダ人中尉を隊長とする警備隊がある。

人口は約一千餘名にすぎない。最も多いのはパプア人で五百名、ついで混血兒二百名、ハルマヘラ二百名、支那人八十名、アンボン人六十名、メナド、サンギル人四十名、ジャバ人三十名、オランダ人十二名、ドイツ人二名で、日本人は南洋興發會社の社員並びに家族五名である。

蘭領東印度に於ては一九二九年以來の世界恐慌の餘波をうけて、新しい植民地を開拓せんとする氣運が漲り、ニューギニアはその第一位に撰ばれた結果、多くの植民並びに移民協會が設立されたが、マノクワを中心としてはニューギニア移植民組合（S・I・K・N・G）があつた。

組合はジャバの貧困階級の救濟を目的として設立されたもので、ジャバ人、混血兒、其他多くの植民者が當地に向つたのであつた。一九三四年には三百七十七名が渡航して來たが、そのうち定住したものは約二百五十名であつた。植民者の自營獨立を目指して各種の運動が行はれた。然し、この組合も結局は一つの試みにすぎなかつたといふ事が出來る。されど、將來の植民に對して多くの教訓を與へるものがある。

町の山手には官舍が並び、道路は比較的良好なものである。こゝには郵便局、無線電信所、

ユリアナ病院、稅關、水先案內所、歐人小學校、兵舍、官營製材所等があり、更にキリスト教會、監獄、K・P・M・代理店、市場等があり、また南洋興發會社は事務所を置いてゐる。支那人の店舗も多い。

排水の設備は完全であり、水道は簡單乍ら飲料水及び湯浴用に供せられる位はある。

また海運の中心でK・P・M汽船は三週に一回寄港し、南洋興發會社はヌシ丸を使用してバラオまで約八百粁を三晝夜にて連絡する。輸出品はコカスと共に鐵木が重要であり、またコプラも多い。米の輸入は當領隨一である。

マノクワリを中心とする數地方はオランダ人及びドイツ人混血兒の植民地で、フアニデイ、アンダイ、パシルプテイ、ウオシ等に約二百名が農耕及び牧畜に從事してゐる。ウオシには官營牧場があつて、數十匹の乳牛を飼育してゐる。

一七九三年、イギリス人がドレ半島のクアイに植民地を開いたのがこの地方開發の最初であり、一八五五年にはペルリンのキリスト教會が布教所を設けた。爾後ユトレヒト傳道教會がこれを引繼いだが、これらの努力は北ニューギニア及びその地の住民に關し裨益するところ少くなくなかつた。

「ホーランヂア」は、太平洋岸の英蘭國境近きフンボルト灣に臨む行政上の主要都市であり取締官が駐在する。

町の北及び西にはシクローブ山脈が迫り、平地は僅少である。フンボルト灣の西岸にはココ椰子が植えられてゐるが、一般に岩石の多い地方である。

氣溫は七十九度で、年降雨量は二千三百三十六耗であるが、雨季にはシクローブ山脈に遮られて雨は幾分少くなつてゐる。從つてホーランヂア奥地は棉作に適すると思はれ、近傍には獨人フオン・ローエン氏の經營する棉花園がある。

住民はパプア人を主とし、混血兒、支那人、オランダ人官吏等がゐる。

こゝではニューギニア植民協會（K・N・G）が、新しき祖國を打ち建てんとして努力したが、マノクワリ近傍よりも自然條件が劣つてゐるため、餘り效果を擧げ得なかつた。

支廳、無線電信所、飛行場、四軒の支那人店舗等があり、K・P・Mのニューギニア北岸航路の終點となつてゐる。一九三八年四月、アメリカのアーチボルド探檢隊が第三次ニューギニア探檢を行つた際、當地を根據地として活動したことは有名である。

「ソロン」は、フオーヘルコツプ西端、セレ海峽の小島ドムにある町で、支廳長たるオランダ人取締官が駐在する。

陸地との間の水道は、水深く投錨地に適する。

住民はビアツク島より移住定着した所謂丸部落人の子孫で總て回教を奉じてゐる。支那人店舗は約十軒あり、商業の中心地で、以前には極樂鳥、現在はコプラ、コパル及びダマルの輸出が盛である。K・P・M汽船の寄港地で、最近飛行場も建設された。

「バボ」は、マツククルーエル灣の内灣ビントウニ灣南岸にある一村落で、土民官吏が駐在する。蘭領ニユギニア石油會社の本據地となつて以來發展しつゝあるのは前述の如くである。

「コカス」は、バボの近くにあり、木材の輸出を以て知られる。

其他、北岸では、南洋興發會社の事業地であるヘールフインク灣左岸の「モミ」、南岸の「ナビレ」、太平洋岸の「サルミ」がある。「サルミ」は、近來黄麻の栽培を中心とし、總面積三千五百ヘクターのうち既に三百ヘクターの開發を終つてゐる。コプラ、樹脂類を出し、米等の生活必需品の輸入が多い。「ナビレ」では樹脂を採集し、「モミ」には棉花、黄麻を栽培する。

スハウテン諸島の「スルイ」は取締官が駐在し、「ボスニツク」と共に樹脂、コプラの集散地として知られてゐる。共にK・P・M汽船の寄港地である。

ーフアクフアク」は、西ニューギニア、オニン半島の南岸にあり、背面は山脈が海岸近くまで迫つてゐる。前面にはパンジヤン島が細長く横はつて波浪を防ぐが、東季節風の時期には時々強濤が灣内に侵入する。然し、灣内は水深く、良港といはれる。西ニューギニア分州の主都であり、副理事官が駐在する。

町は丘陵の中腹、海拓約八十米の處にあり、土壤は石灰質であるため植物の栽培は困難である。

政廳、郵便局、病院、布教所、回教禮拜堂等があり、支那人店舗は約二十軒存在する。住民中には多くの支那人、マレイ人、アラビア人の商人があり、商取引が盛である。輸出品の主なるものは肉豆冠花、コプラ、貝類で、米を最も多く輸入する。K・P・M汽船が寄港してゐる。

「カイマナ」は、カイマナ灣岸にあり土民官吏が駐在する。灣内の水深は適度で、K・P・M汽船の寄港地である。コプラ、樹脂、肉豆冠、肉豆冠花、貝類、海鼠等を輸出し、米を輸入する。

「メラウケ」は、南ニューギニア副分州の主都で、取締官以下二十名の歐人がゐる。

町はメラウケ河の左岸、海より程遠くないところにあり、面積は廣い。住民としては、支那

人、パプア人、ジヤバ人、其他東印度諸島の住民があり、支那人店舗は七軒、オランダのリトペ・フラウエの布教所があり、この地方の實狀を知らしめるに貢獻してゐる。

コプラの輸出は當領第一位にあり、魚類、煙草等も輸出する。輸入品としては米が最も多く生活必需品、石油類も輸入される。K・P・M汽船の南ニューギニア航路の終點となつてゐる。

「タナメラ」、同名の地が多いが、これはヂグール河上流四百六十粁の地點にある町で、東印度の流刑地の一として有名である。五百噸の汽船はこゝまで溯航し得る。ボーフエン・ヂグールの政廳があり、歐人官吏駐在し、飛行場もある。

町は三區域よりなり、政廳區、兵舍區、一般區が嚴然と區別されてゐる。流刑者は最近の調査によると五百六十五名であり、そのうち六十五名は女、約百五名は子供である。一九二九年には流刑者の數は約二千百名に達してゐた。

ロ、委任統治領

ビスマルク群島のうちニューブリテン島は最大にして最も重要なる島である。火山帶に屬し海岸線に沿うて活火山と多數の死火山がある。

「ラバウル」は、ガゼル半島、シンプソン灣の東岸に位する。平均濕度は八十三度、降雨量は二千二百五十四粍であるが、キエタ、ウエワクと共に當領では降雨量の少ない地方である。港は水深適度、風浪を避け、暗礁も少く良港である。

ニューブリテンの主都で、最近に至るまでは委任統治領の主都にして政廳の所在地であり、行政長官が駐在したが、濠洲政府は一九四一年九月、數回に亙る火山爆發の被害を恐れ、本土のラエに移轉を發表してゐる。

人口は市街地四千五百、附近部落を併せると一萬二千五百で、そのうち歐人九百名、支那人千五百名、邦人にして在住するものは約二十名である。

聖心派カトリック教會、メソヂスト教會等が布教、住民の教化に當つてゐるが、住民はパプオ・メラネシア族等約一萬で文化程度も低く、男女とも白い腰卷を着用する丈である。

市内は街路整然として熱帶樹の並木が美しく、附近各地に自動車道路が開けてゐる。政廳を始め、税關、裁判所、無線電信所、植物館、發電所、病院、諸會社等の近代建築物があり、飛行場も設けられ、政治、經濟、交通の中心地である。バーンズフィルプ汽船、大阪商船及び南洋貿易會社の汽船が寄港する。埠頭は長さ五十九米の棧橋や八百噸の船舶を入れる船渠、倉庫等

も具はつてゐる。コプラと海物が主要な産物である。

ラバウルは風光明媚にして、マラリアの流行ある外は比較的健康地であり、附近には溫泉が湧き、日本人には別天地の感がある。

ラバウルから灣岸を追つて自動車道路がココボに通じてをり、ココボは獨領時代軍事施設で賑はつてゐた處である。

「ガスマタ」、「リンデンハーフエン」は共に南岸にあり、雨量は甚だ多く、ガスマタでは實に六千七百粍を突破する。共に良港であるが、後者は定期船が寄港する。

「カヴイエン」はニューアイルランドの政廳所在地で、この島の北端にある良港である。バーンズ・フイルプ汽船及び南洋貿易會社汽船の定期寄港地で、二千噸以上の船舶を着岸せしめる埠頭設備があり、無線電信所、燈臺等の設備も整つてゐる。政府設立の土民學校がある外、カトリック教會も學校を經營してゐる。西岸及び南岸に沿うて自動車道路が通じてゐる。この町は行政支廳、郵便局等あり、支那人數百名、邦人も數名在住するといはれてゐる。

「ナマタナイ」からカヴイエンまでは二百二十粁の道路が通じてゐる。

「キエタ」は、キエタ區の主都で、ソロモン群島、ブゲインビル島の東岸にある良港である。

「サラモア」は、本土モロベ區の重要な町で、フォン灣の奥、ベイヤーン灣とサラモア灣を隔つ地峽にある。港は遠淺で、餘り廣くないが、奥地の金山開發につれ、交通上の要點に位するところから發達し、行政支廳、法院、銀行もあり、バーンズ・フイルプ會社の立派な岩壁、倉庫等もある。同社の汽船其他多くの汽船が寄港し、無線電信局、飛行場の設備も完備し、濠洲とラバウル間とに定期航空が通ずる外、モロベ區の金山各地との連絡も盛である。人口は約千二百名で歐人は六百七十名、支那人は約百名である。

「ラエ」は、サラモアの近くフォン灣の奥の北岸にあり、マーカム河口にある。モロベ金山のため新しく發展した町で、本區の航空事業に關しては歴史的な意義を有してゐる。ギネア航空會社其他の航空會社の基地となつてから奥地との交通は非常に發達し、ブロロ、ワウ等と連絡してゐる。

ラバウルよりの主都移轉問題に就てサラモアとその爭奪戰が演じられ、嘗てはサラモアに新主都を決定してゐたが、一九四一年濠洲政府の發表したのはラエであつた。

「マダン」はマダン區の主都、アストロラベ灣に臨み、灣頭にはグラガット島ほか數個の小島が點在し、完全に波浪を防いでゐる。雨量は多く年三千粍を超える。政廳あり、歐人及び住

民の病院、製材所、キリスト教布教所、飛行場があり、また無線電信局、棧橋等がある。棧橋は七十一米あり、港の水深は六米餘である。バーンズ・フイルプ汽船が寄港する。

一八八六年ドイツのニューギニア會社がこゝに始めて拓殖地を設け、フレデリック・ウイルヘルムスハーフエンと稱した。現在の人口は約千六百名、そのうち歐人及び支那人は約五百名である。コプラが主産物であるが、製材業も盛で鐵木の輸出は有名である。

「ウエワク」はセピック區の太平洋岸にあり、前方にはチスフル島があるが、港は廣きに失し、外海からのうねり波を防止し得ない。

「アイタペ」はウエワクの西方にあるセピック區の主都で、元アイタペ區といふ行政地區があつた時代より政廳所在地で、セピック區に合併されてから行政廳はウエワクに移されることになつてゐるが、適當の時期までこゝに置かれる筈である。こゝには約五千、ウエワクには約千五百の土着民がゐる。

アドミラルチー諸島には「ロレンガヌ」があり、マヌス區の主都で、定期船の寄港地、無線電信局がある。主としてコプラを輸出する。

ハ、英領パプア

「ポートモレスビー」は、當領の主都であつて中央區にある。パプア灣東岸の小入江にあり灣外は堡礁を以て保護せられ自然の防波堤をなしてゐる。堡礁の入口は南方バシリスク水路、西方リリブラツド水路があつて共に航行は安全である。

ニューギニア全島中最も寡雨の地であり、時として飲料水の缺乏に惱むこともある。氣溫は年平均八十二度で最高は八七・三度、最低は七六・八度である。相對濕度は七五%で比較的健康地である。西方は四百——六百呎の丘陵、東方には約八百呎の丘陵があり、北方のラエス山が秀麗な姿を見せてゐる。晴れた日には中央高山脈の高峯が一齊に山容を現し、景觀誠に壯大である。

政治、經濟、交通の中心地にして、副總督以下の官吏が駐在し、人口は一千名足らずであるが最近は軍隊も增されてゐるため相當の數に上るものと見られる。政廳ほか各機關、稅關、郵便局、學校、病院、ホテル、ニューサウスウエールス銀行、濠洲聯邦銀行等の銀行、諸會社、並にロンドン傳道協會の本部がある。病院は歐人と土民とはそれぞれ別個の病院を政府が經營

してゐる。そのほか、電燈、水道の設備もあり、無線電信局はアマルガメイテツド無線會社に屬する。また埠頭は大小幾多の棧橋を有する。バーンズ・フィルプ會社及び其他の汽船の主要寄港地であり、また濠洲とは定期航空路があり、各產物の取引は盛である。

「サマライ」はニューギニア本島最東南端を距る二浬の小島サマライ島にある開港場である。島は長さ半哩、幅員四分の一哩、面積僅かに六十エーカーに過ぎぬ小島であるが、二三の丘陵あり、高さ百五十五呎、附近は風光明媚である。雨量はポートモレスビーの二倍であるにも拘らず飲料水に缺亡するといふ。

住民のうち歐人は約百四十名位である。東區の主都にしてアマルガメイテツド無線會社の電信所、ホテル、學校、病院等がある。棧橋は政廳のもので、濠洲とニューギニア間の定期船が寄港し、近海面に出漁する漁船の必需品を供給する基地である。コプラ、乾燥ココ椰子、ゴム等を輸出する。パプア東部の商業中心地である。

「ダルー」は、フライ河々口近くにある一小島に位する開港場で、西部では唯一の港であるが、暗礁多く、東南方のみが航行可能である。西區の政廳所在地で監獄もある。一八九〇年南西三十浬のマバドアンに政廳を設けたが、不便なるため一八九三年にこゝに移され、西部に於

ける中心地となつた。本港はトレス海峡方面へ出漁する眞珠貝船の出入が頻繁で、南方濠洲の木曜島を距ること餘り遠くない。

其他パプア灣に沿うては「キコリ」、「ケレマ」の二地があり、前者はデルタ區の、後者はガルフ區の政廳がある。ケレマはその西に連なるナボ山脈と共に、狂暴なककक族の住むのを以て知られてゐる。

「ココダ」は、北區のマンバレ河支流のヨダ川に沿ふ行政上重要なる地點で、支廳、監獄、政府のゴム園等がある。椰子はこの地方ではよく成育するが、海拔四百米の高處のためか結實せぬといはれる。土民の珈琲栽培は最近盛になつて來てゐる。ヨダ川は金產地として有名である。

眼を轉じて東南海面に注げば、實に多くの島々や珊瑚礁が散在し、金の產出で世人の注視を浴びた處が多いが、都市として見るべきものはなく、僅かにウツドラーク島の「ポナガイ」に行政官吏が「クラマダウ」に地方官吏が駐在し、ミシマ島の「ブワガオイア」が南東區の政廳所在地である位のものである。

七、ニューギニアの將來

以上概觀したところからニューギニアの將來を考察せんとするのであるが、これまでニューギニアといへば奇妙な土民の習俗とか極樂鳥とかにすぎなかつた結果、これが基礎となるべき資料を參照することを得ないため、皮相的となるを免れない。

ニューギニアの統治は蘭領たると英領たるとを問はず、政府の力の及ぶ範圍は海岸地方に局限されてゐる。兩者を比較すればまだしも英領の方が勝れ、蘭領の凡そ半ばに過ぎない英領パプアは中央政廳の下に八行政區を有するに反し、蘭領にては從前通りモルツケン理事州の管下にある。既に、オランダに於てもこれがニューギニア自身にとつて格別有利ならざる故、獨自の行政地方となすべきであると唱へられてゐる。これがためには土地の根本調査、道路、鐵道等交通機關の完備が必要とされるが、道路の敷設は人口の稀薄等の理由により高價な犧牲を拂はねばならぬため、その實現を近き將來には望むべくもないであらう、從つて多くの支廳設置も未だその機運さへ見當らない。蘭領にてはかくして獨立の行政地方として有能なる人士に多大の獨立性と、長年月を與へて自由に才腕を振はしめるのが效果的であるといはれる。

本島の今日の經濟情勢を見ると、先づ蘭領に於ては開發の對象は主として林産及び農産に向けられてゐる。當領の輸出品の大宗はコプラ、コパル及びダマル樹脂であつて、一九三二年以來南洋興發會社は棉花の栽培に好成績を示してゐる。蘭印政府は種々探檢隊を派遣したが、その多くはゴム、カポック、珈琲等有望と思はれる物産栽培の基礎的調査を目的としたものであつた。當領の地質は殆ど未知であり、僅かに英領よりの類推によつてゐるのみであるから、鑛物資源は多いと云はれるにも拘らず何等の開發も行はれてゐない。

委任統治領の事情は著しく異つてゐる。農産資源としてはココ椰子が第一位にあるが、鑛産主として金の採取が發達してをり、その中心地なるモロベ區はニューギニア何れの地に比しても最も開發の進んだ地方となつてゐる。比較的接近し易い肥沃なる島々が本土の東邊に位し、獨領時代より開發が進められてゐた結果、多くの農園があり、輸出品としてはコプラの外にカカオ、珈琲等がある。

英領パプアは大體委任統治領と軌を一にしてをり、農産としてはコプラ、ゴム、鑛産としては金が主要である。

この經濟開發に至大の關係を有するものは交通機關の發達であるが、兎角蘭領は英領に比し

て總ての點に遲れ、最も重要なる海運に於てすら、最近はK・P・Mは四週一回の航行を三週に短縮したにすぎぬ有樣であるが、英領に於ける盛な海運の現狀に比すれば著しく立遲れである。

ニューギニアは原始の狀態から急に近代文明の明るみの中に浮び上つて來た島であるため、今後の交通機關として重きをなす飛行機は當然利用されて然るべきであらう。英領に於ては古くより用ひられてゐるに反し、蘭領では最近容易くその緒についたばかりである。

更にニューギニアの經濟的開發に大資本の進出の必要なることは各領共に云ひ得るところであつて、英領に於て金鑛業が著しい發展を遂げたのは前述の如く大資本の進出が與つて力あつた結果によるのである。金を求め徒手空拳にて産金地に乘り込んだ單なる幸運探求者は、ニューギニアの開發には何等影響するところがなかつた。

蘭領に於ては日本の進出に對抗するため前述の二特權會社を設立したが、更に一九三八年、ニューギニアの大規模な開發計畫の具體化に一進展を劃すべき重要なる會社がアムステルダムに設立された。蘭領ニューギニア會社がそれで、兼ねてオランダ國會に於ける植民大臣の議會演說中に示されたニューギニア開發會社案がこゝに成果を見せたのである。この社の設立には

オランダ及び蘭領東印度に於ける植民地關係の民間重要企業が悉く參加してをり、設立資本は二百十萬盾で、現業の指導管理は蘭印支社がこれを行ひ、母國の本社がこれを監督するのである。この計畫の主要課題は經濟的にニューギニアの高度の開發を實現するにあり、この新會社の背後にある尨大資本の威力が、ニューギニアの大規模な調査を實現せしめることを期待させる。

大資本が進出した曉に最も困難となる問題は勞働力の問題で、人口稀薄なるニューギニアに於て、充分なる勞働力を提供し得ないであらうことは推察に難くない。而して近代文明と全くかけ離れたパプア土民を以てしては能率は上らない。そこで移植民問題が登場するに至るのである。

蘭領に於ては一九二九年以來種々の協會が政府の援助を得てニューギニア植民を行つて來たのであつた。第一には世界恐慌により生活の道を失はんとしてゐた一般貧困階級の救濟を目的とし、第二には彼等の移住定着によつて當領の開發を目論んだのである。その對象となつたのはジャバ人であり、印歐混血兒であつた。その結果は當然豫想されてゐたところに一致し、移住の生活は慘憺たる狀態を呈した。殊にホーランヂアを中心とする移植民に於てはこれが甚し

かつた。その結果、終に蘭印政府は干渉に乗出し、既に非常な困難に陷つてゐた移住者をジャバに送還したのであつた。この實例の教へるところが我が日本人に當嵌ると考へてはならない。單にニューギニアに於て嘗てオランダ人により失敗を豫想された棉作に成功したといふ丈に止まらず、廣く南洋各地に於ける實例を見れば自から明かとなるであらう。

パプア人勞働力を利用する上に於て歐人のとつて來たところを見るならば、多く契約勞働者として利用してゐる。然しその賃銀は貨幣或は主として食糧品である物品を以て、支拂ひをなすにしても幾分高價につくことを覺悟せねばなるまい。

宗教及び教育の立場より見れば、住民の教化は未だ全く進んでない。キリスト教各派の布教所は三領共に相當開拓者的な事業に從事しつゝあるとはいへ、未だ森羅萬象に關する雜多な迷信邪教を信ずるパプア土民の改宗は甚だ困難である。

住民の教化のための學校設置は英領に於ては多少蘭領よりも勝れてゐる。蘭領に於てはマノクワリ其他二三の地を除いては全く見るべきものがない。蠻地を開拓する場合の常として歐人は必ずその宗教卽ちキリスト教を利用する。その宣教師達と接觸した土民にあつては著しい影響のあることを見逃すことは出來ない。布教所は學校及び農園を設置して土民の教化に當るの

が普通であり、英領に於てはその農園より産出する農産物にも見るべきものがある。

ニューギニアは政治的喧噪の渦中に引き入れられた現狀であるが、その根底にはやはり經濟上の問題も亦存在するであらう。

その地理的位置より見て、當然、日本、東印度、アジア地域と濠洲の中間にあるこの島の將來に負はされる役割は決して僅少ではない。濠洲は濠洲自身の前門としてニューギニアを重視せることは歴史の示すところであり、蘭領ニューギニアがオランダに放置せられた狀態にあるのと比較すれば英領の開發の進めることは至極當然のことである。そしてまたこの事はニューギニア開發の可能性を充分に證明してゐるものと見られるのである。

とまれ、この廣大なる無人境が、永年の眠りの儘に沈潛することは、大東亞のため將又世界全人類のため決して希求されるところではあるまい。

その開發こそ我に課せられたる一つの使命である。世紀の進軍は歩武堂々として進められつゝある。

赤道直下、果知れぬ未開の地の存するところ、大ニューギニアは招く。

八、ニューギニアに關する文獻

地域をニューギニアに限ると歐文文獻でも著しく數は少くなつてくる。その少いものですら現在では殆ど入手困難であるから、こゝには現在までに刊行された邦文文獻の若干を紹介するに止める。

一、ニューギニアに關する文獻目錄（正岡壽・東亞研究所報第十二三號・昭十六・東亞研究所・非販賣物）

東亞研究所の調査のために作成したもので、洋書と邦書の部に分れ、各項目別に細分してあり、雜誌論文も集錄されてゐる。最後に邦書が取纒められてゐる。

二、ニューギニア地名集成（增井貞吉・南洋經濟研究所・昭十三・頒價〇・七〇）

ニューギニア全島に亙りあらゆる地名を網羅したもので、A・B・C順に配列してあり、概位及び要項の說明が附されてゐる。この種のものとしては唯一のもので、ニューギニアに關心を有する者の缺くべからざるものであらう。

三、ニューギニア探檢（金平亮三・養賢堂・昭十七・價二・八〇）

ニューギニアの珍談奇談を相手にすることなく、美しい寫眞や圖と共に動植物及び民族學的解說を加へてある。ニューギニアの自然を知るに極めて適當せる書である。

四、蘭領ニューギニア探檢（金平亮三・文部省內資源學科學諸學會聯盟・昭十六・價〇・五〇）

五、大ニューギニアの相貌（井上義男・興文社・昭十七・價二・八〇）

六、濠領ニューギニア風土誌（白石譽夫・岡倉書房・昭十七・價一・七〇）

七、ニューギニア（南方產業調査會編・南進社・昭十六・價〇・八〇）

なほこの外各官廳の調査報告書があるが、一般の入手は困難なので割愛してをく。

昭和十七年十二月五日　納本印刷
昭和十七年十二月十日　發行

著述者　印

（定價　金壹圓）
（送料　六錢）

著作兼發行者　東京市小石川區春日町一ノ一　日本拓殖協會　柴山武德

印刷者　東京市神田區旅籠町二ノ十二　青田伊祐

印刷所　東京市神田區旅籠町二ノ十二　廣業館

配給元　東京市神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社
日本出版文化協會會員番號二二二一八三號

917
165

拓殖叢書

B六判 各篇 約二〇〇頁
定價 一・〇〇 送料 〇・一二
各篇 口繪寫眞數十葉入り 附錄 六色刷最新地圖

（既刊）

第一篇 佛領印度支那
第二篇 海南島
第三篇 比律賓
第四篇 印度

（近刊）

緬甸
泰國
馬來
東印度
ボルネオ
ニューギニヤ
濠洲

○書店に品切れの節は直接發行所に御註文下さい
○當協會刊行圖書目錄御入用の方は郵券四錢お送り下さい

東京市小石川區春日町一ノ一
發行所 財團法人 日本拓殖協會
電話小石川 三八九一番 四四七七番
振替口座 東京 一四三三五〇番

917
165

終